研究調査報告　第 392 集

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究

～フォニックスを活用した実践を通して～

２０１４／３

四日市市教育委員会　教育支援課

は　じ　め　に

四日市市では，平成２３年度からスタートした第２次四日市市学校教育ビジョンの取組も３年が経過しました。この学校教育ビジョンでは，「『生きる力』『共に生きる力』をはぐくむ」を基本理念に，「めざす子どもの姿」である「輝く　よっかいちの子ども」実現のために，「途切れのない支援」「段差のない教育」「家庭・地域との協働」の３つの視点を基盤として，「問題解決能力の向上」「豊かな人間性の育成」「特別支援教育の充実」「教職員の資質・能力の向上」等８つの重点課題を掲げ取り組んでいます。

教育支援課では，学校教育ビジョン実現に向け，教職員の資質・能力の向上を目指して幅広い研修を進めてきました。

とりわけ，教職員一人ひとりのライフステージに応じた資質・能力，実践力を身につけるため，「教師力向上研修」を進めてきました。校園内での日常的なＯＪＴ研修や多様な研修活動の充実を図ると共に，自己相互研鑽を活性化してきました。

また，児童生徒の実感を伴った学習理解を図るために，企業が持つ知識・技能・経験を活用した連携授業を行ったり，科学への知的好奇心・探究心を高め，科学的な考えや見方を育てるために，「四日市こども科学セミナー」を開催したりしました。多くの参加申し込みがあり，参加した児童生徒からは好評とする感想が聞かれました。

これらの取組に加えて，本市の課題である「外国語活動・英語教育の推進」「生徒指導・教育相談の充実」「校・園内特別支援教育推進体制の充実」を本年度研究課題に設定し，授業実践や調査・研究を進め，その成果をここに研究調査報告書としてまとめました。これらの研究成果が，教育課題の解決に向けた学校・園の研修・研究において活用されるとともに，日々の教育実践に役立つことを期待します。

最後に，本課の研究調査を進めるにあたって，御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部の松尾知明総括研究官，並びに研究協力員をはじめとして調査・実践面で御協力いただいた学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成２６年３月

四日市市教育委員会教育支援課
課　長　　西浦　昌宏

— 目 次 —

Ⅰ　研究主題 ・・1

Ⅱ　主題設定の理由

1　小学校における外国語活動の現状と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　子どもの発達段階に応じた外国語指導法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3　効果的な文字指導として期待されるフォニックス ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

4　小学校外国語活動にフォニックスを取り入れる意義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅲ　研究の目的 ・・5

Ⅳ　研究の内容・方法

1　研究内容・・5

2　研究の方法・・・9

3　研究の計画・・12

Ⅴ　結果と考察

1　児童の英語活動に関する事前調査から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

2　フォニックス指導実践 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

3　結果 ・・22

4　考察 ・・28

Ⅵ　研究のまとめ

1　研究の成果 ・・29

2　研究の課題 ・・30

［引用文献・参考文献］・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

［資料］・・・32

Ⅰ　研究主題

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究
～フォニックスを活用した実践を通して～

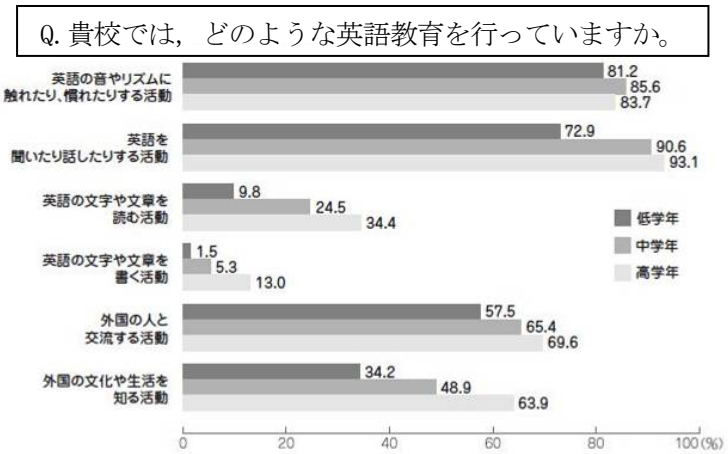
Ⅱ　主題設定の理由

1　小学校における外国語活動の現状と課題

⑴ 「聞く・話す」中心の小学校外国語活動

文部科学省は，小学校の英語教育の開始時期を現行の５年生から３年生に引き下げ，５年生からは正式に教科にする計画を公表した。現在５・６年生で週１回行われている外国語活動を，３・４年生で週 1～2 回，５・６年生では週３回に増やし，2020 年をめどに全面実施をめざすという内容である。読売新聞（2013）によると，「世界で活躍する人材を育成するため，早い時期から英語力を身に着けさせるのが目的。教科化に伴い，（中略）検定教科書を使って，読み書きを含めた基礎的な学習を行う」（P. 1）とある。次回の学習指導要領改訂時には，小学校外国語活動は正式に教科となり，授業時数も大幅に増加する。学習内容もより高度なものになり，文字を使っての「読む・書く」指導を行っていくことになる可能性は大きい。

一方で，平成 23 年度から必修化された小学校外国語活動では，「聞くこと」「話すこと」の２領域に重点がおかれている。現行の学習指導要領のねらいには，「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」（P. 7）とある。図１のベネッセ第１回小学校英語に関する基本調査（2006 年）でも，「どのような英語教育を行っていますか」という質問に，「英語を聞いたり話したりする活動」を行っていると答えた学校が 90％以上である。それに対して，「英語の文字や文を読む活動」を行っている学校は 34％しかない。小学校段階ではあくまでもコミュニケーション能力の素地の育成ということで，特に「聞く」「話す」という音声面での慣れ親しみを目的に外国語活動が行われているのが現状である。

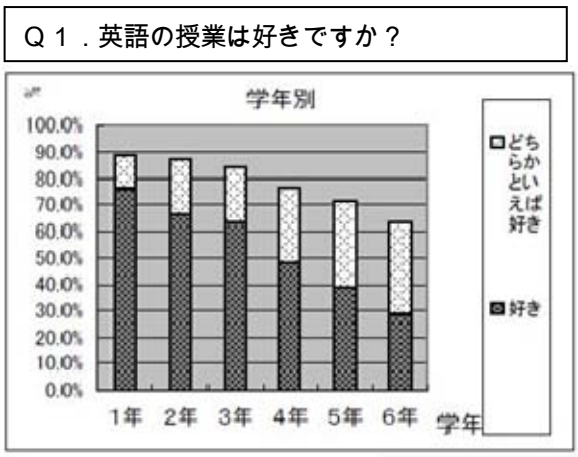


【図１】　ベネッセ第１回小学校英語に関する基本調査
注：ベネッセコーポレーション(2006)　P. 43

⑵　学年が上がるにつれて低下する意欲

このような音声中心の外国語活動では，学年が上がるごとに子どもたちの学習意欲が低下し

ている。図 2 の平成 21 年度に文部科学省が行った「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート」によると，小学校における英語活動は，おおむね楽しくできているという結果だった。しかし，高学年になればなるほど，「英語の授業が好き」と答える児童が減っていることがわかった。この理由の一つとして考えられるのは，小学校で行われている音声中心の外国語活動が高学年の子どもたちに適していないからではないだろうか。



【図 2】「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート」
注：文部科学省（2009） P. 1

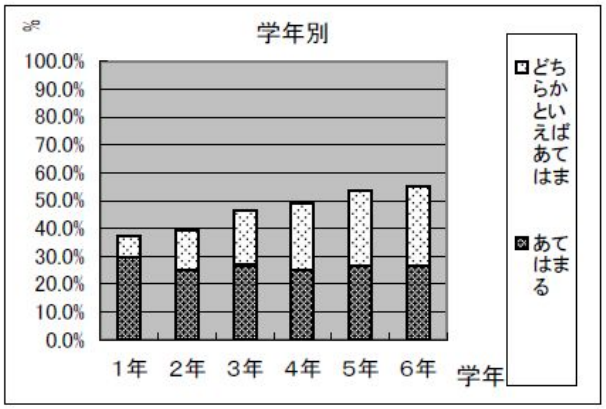
小学校における外国語活動で行われている音声中心の指導方法の一つに,「ワード･メソッド」がある。これは文字を使用せずに，単語を聴覚のみで教える教授法のことで，例えば花の絵のカードを見せながら「フラワー（flower)」と発音して，繰り返させるという学習活動などのことである。文字を覚えていなくても発音できるので，初期の学習にはよく用いられる。前述のベネッセの基本調査の結果でもわかるように，英語に慣れさせようと，多くの小学校では，このワード・メソッドを用いた授業を行っている。確かに，小学生のうちからたっぷりと英語に触れさせる機会をもち，その中で日本語と英語の音声の違いに気づかせ，自発的に発話し英語の音声を習得するというプロセスは，言語習得の理想的なプロセスと言える。

しかし，こういった学習方法では文字と音とを結びつけて学習しておらず，定着力は弱い。久埜（1996）は「３年生前半くらいまでは日本語とは異なる英語独自の音を柔軟に習得していく力，間違いを気にせず，聞こえた通りに真似しながら表現しようとする積極性が維持されるが，４年生になるころには，だんだん薄れてくる」(P. 29）と述べている。また，「(学年が上がると)音声中心の指導が次第にやりにくくなるのは事実で，活発な授業づくりのためには，言語材料の提示にも彼らの心を揺さぶり動かす題材を注意深く選ばなくてはならない」(P. 29) とも述べている。さらに，アレン玉井（2008）は「小学校でも学年があがるほど文字を媒介とした授業が増えている。教科教育も一段と進む高学年になると学習ストラテジーを獲得した子どもたちは新しい知識を定着させるために文字を活用する。（中略）特に，中・高学年で，英語の時間だけ文字を使用しないのは不自然であり，さらには子どもたちの学習意欲を低下させる要因になりかねない」(P. 17）と述べている。文字は手がかりにはならないため，子どもたちは文字を見てもその単語を発音することはできないし，他の単語への応用力はない。特に高学年になると，ただ真似したり繰り返したりしているだけではなく，その発達段階に応じた手段も取り入れていかなければ，子どもたちの学習意欲は持続しない傾向にあると言える。

２　子どもの発達段階に応じた外国語指導法

以上のことから，外国語活動においては，発達段階を踏まえ，子どもたちの学習意欲が持続することができる学習内容と活動を設定していくことが大切である。特に，高学年では，知的満足感を得るために，文字の使用は不可欠ではないだろうか。小学校段階における文字の導入については，時期尚早であるとか，英語嫌いの子どもを増やすなど，これまでもさまざまな議論がなされてきた。しかし，文部科学省のアンケートによると，図３のように高学年になるほど文字に対する興味・関心が高くなっていることが伺える。このことから，文字を読む活動を取り入れることは，高学年の子どもたちの発達段階に応じた指導法の一つであると考えられる。

Ｑ４．英語の授業で楽しいと思うこと
　サ．英語の文字や単語を読むこと



【図３】「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート」
注：文部科学省（2009）　P. 14

そこで，今回注目するのがフォニックスである。フォニックスとは，発音指導の手法であるが，同時に英語の文字とそれに対応する音との関係を学ばせる指導法のことである。日本語は文字と音が一致している表記法をもつのに対し，英語は文字と音がほとんど一致していない言語である。つまり，アルファベットを学習しても，英単語を読むことができないし，聞き取った発音から文字や単語の綴りを想定できない。そのため，イギリスやアメリカなどの英語を母国語とする国では，基本的な英語の文字の読み方指導としてこのフォニックスを行っている場合が多い。

３　効果的な文字指導として期待されるフォニックス

そこで，四日市市における現状を把握するために，市内の小学校外国語活動研究協議会に所属する小学校教諭にアンケートを行った。その結果，表１のように，ほとんどの人がフォニックスを実践したことがなく，その認知度も低いことがわかった。その理由としては，フォニックス自体を知らないこと，フォニックスは知っているが具体的な指導方法がわからないこと，効果には期待しているが小学校における文字の指導には抵抗があることなどから，実践はあまり行われていない。また，文字の取り扱いについては，あくまでも音声によるコミュニケーションを補助するものとして考えられているため，文字の指導は中学校から行うという意識が強いこともその原因の一つと言える。

【表１】アンケート結果

質問項目	はい	どちらともいえない	いいえ	無回答
これまでに英語の授業で，フォニックスを行ったことはありますか？	３人 １５％	２人 １０％	１５人 ７５％	０人 ０％
この研究協議会の会員以外で，英語の授業でフォニックスを行っている先生は多くいると思いますか？	０人 ０％	６人 ３０％	１３人 ６５％	１人 ５％

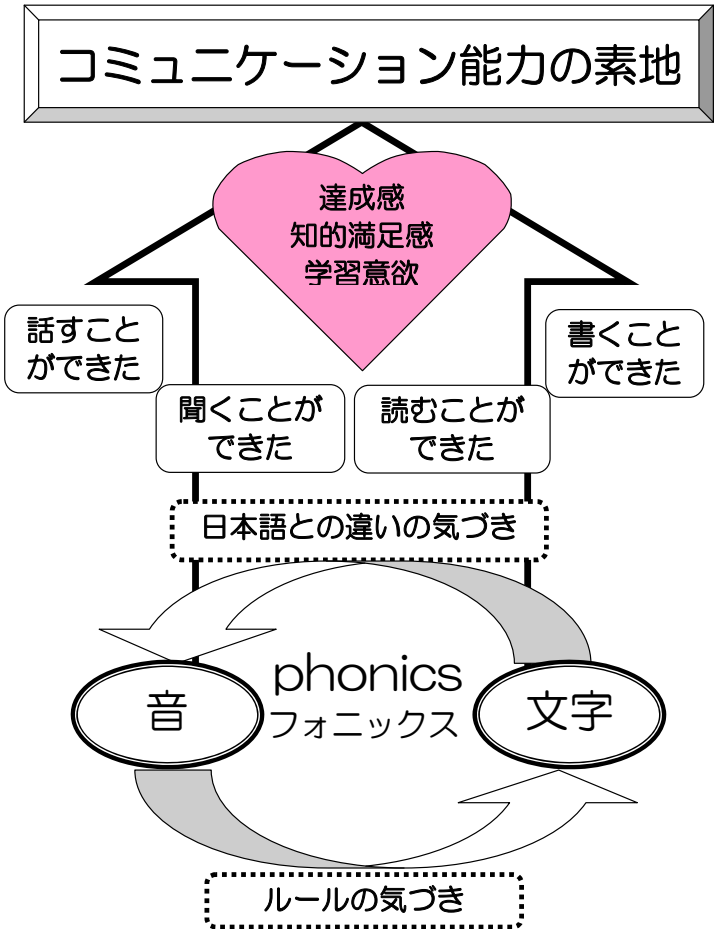
このように，四日市市の小学校ではまだ実践例の少ないフォニックスだが，今後の教科化も見通しながら，高学年の外国語活動に取り入れていくカリキュラムを考えて実践したい。先にも述べたように，高学年の子どもたちは文字に興味を持っており，小学校においても文字指導が実施される可能性も出てきた。そういった現状において，フォニックスは小学校の外国語教育において効果的な文字指導であることが期待される。東（2005）は「中学年までは楽しく参加していた歌やゲーム中心の英語活動に対して冷めた態度が出始める高学年では，フォニックス指導はその知的欲求を満たす活動になりうる」（P. 114）とフォニックスの有効性について述べている。フォニックスのルールを身につけることにより，「英語が読めた」「聞き取った英語から単語の綴りがわかった」などの具体的な自己評価につながり，「わかると楽しい」「もっとやってみたい」といった積極的にコミュニケーションを図る意欲につながると考える。しかし，管見の限りではデータをもとにその効果を明らかにした研究は見られない。そこで本研究では，フォニックス指導を通して，英語特有の文字と音との結びつきの規則性を学ぶことで，音韻認識力が高まり，聞き取った音から文字や単語の綴りを想定したり，文字を見てそれを発音したりする子どもが育成できることを明らかにしていきたい。

4　小学校外国語活動にフォニックスを取り入れる意義

小学校外国語活動にフォニックスを取り入れることで，どのような効果があるのか，図４の研究構想図にまとめた。

外国語教育における最終的な目的は，コミュニケーション能力を育てることである。小学校外国語活動は，その最初の段階であるコミュニケーション能力の素地を養うことがねらいである。コミュニケーション能力の素地とは，聞く・話す・読む・書くといった４技能に加えて，英語を使うことに対する意欲であると考えられる。

フォニックス指導を行うことで，音と文字とのルールが理解できることにより，音韻認識力が高まる。音韻を認識できるということは聞く力が高まることにつながり，聞き取った英語からその綴りを予想することができるようになる。また，音韻認識力の向上は，読む力が高まるこ



【図 4】　研究構想図

とにもつながり，知らない単語でも，綴りを見れば発音できるようになる。さらに，聞く力や読む力といった英語の基礎的な技能を向上させることで，達成感や知的満足感につながり，積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成につなげていくことができると考える。

このように，本研究の意義は，フォニックス指導を行うことが，高学年になるにつれて意欲が低下する子どもたちにとって，効果的な指導法となることを示すことである。

Ⅲ　研究の目的

本研究の目的は，小学校外国語活動において，フォニックス指導を行うことによって，子どもが自らの力で英語を聞き取る力や，文字を読む力を育成できることを明らかにすることにある。

Ⅳ　研究の内容・方法

1　研究内容

⑴　フォニックスとは

アルファベットを使用する言語の中でも，英語の文字と音との対応規則は例外も多く複雑である。日本語では，平仮名の場合，かな文字と音が一致している表記法をもつので，50 音を覚えれば，意味はわからなくても単語や文章を読むことができる。それに対して，英語はアルファベットの文字と音がほとんど一致していない言語である。英語には 26 文字のアルファベットがあるが,「エイ，ビー，シー」はアルファベットの名前であり，その読み方は別である。“A”＝「エイ」，“B”＝「ビー」と発音する単語はほとんどなく，“A”であれば「ア」,“B”であれば「ブ」と発音することが実際には多い。特に母音は“A，I，U，E，O”の 5 つの文字に対して，発音は 20 通りもある。同じ文字でも異なる発音となるため，単語の発音を，一つ一つ覚えていかなければ，単語や文章を自分で読めるようにならない。

そのため，フォニックスという指導方法がある。英語圏の国では，1800 年代後半より，フォニックスが主に初等教育の段階で英語の「読み方」を教えるための教育方法として広まっていき，各国で研究がなされてきた。松香（1981）によると，「例えば，“b”という文字は「ブ」という音だ，“e”という文字は「エ」という音だ，“d”という文字は「ドゥ」という音だと習うわけですから，これを学ぶことによって子供は初めて“bed”という単語を見た時に，それを声に出して読むことができるのです。もしフォニックスがなければ（中略）「ビィー」「イー」「ディー」というようにアルファベット読みすることしかできず，単語に結びつけることはできません」（P.12）とある。１つ１つの英語の文字とそれに対応する音との規則性を身につけさせる。そして，最終的には１つの単語の発音ができるようになるというのがフォニックスの考え方である。

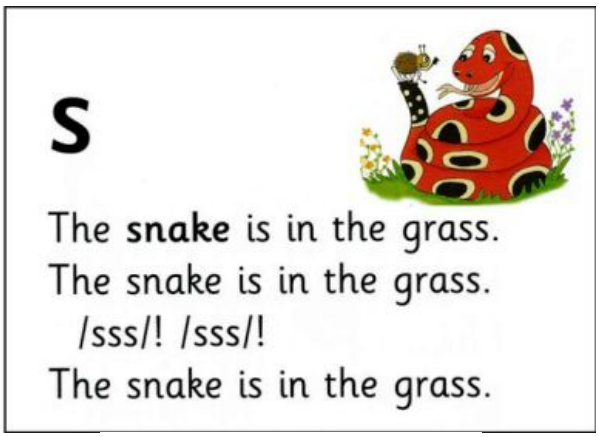
⑵ 本研究で実践するフォニックス

英語圏でとても高い評価を受けているフォニックス指導法の一つにジョリー・フォニックス（Jolly Phonics）がある。イギリスの小学校教師であったスー･ロイド（Sue Lloyd）によって提唱されたフォニックスの指導法で，イギリス国内はもとよりオーストラリア，ニュージーランド，そして最近ではアメリカでも導入されるなど世界 100 カ国以上で支持されている。表 2 のように，文字を 26 文字のアルファベットではなく，基本の 42 のレターサウンド（日本語の平仮名に相当）とし，頻出文字・音順に 7 つのグループに分けている。42 のレターサウンド全てに①ストーリー（物語）②絵③動作・振り付け④歌がついているので，五感をフルに活用して，それぞれに対応する音の規則を学ぶことができる。例えば，“S”のレターサウンドを学習する場合，ヘビ（snake）が草むらにいるというストーリーが設定されている。図 5 のように“S”の形をしたヘビの絵と文字を提示し，子どもたちは“S”の形をなぞる動作もしながら，歌を歌う。この活動を通じて，“S”の発音にヘビの鳴き声を連想させて覚えることができ，“snake”は「スネイク」と発音することができる。ただ単に単語の発音を繰り返して音を覚えるといった学習の単調さを解消し，体を使って記憶を助けるような工夫がなされている。

【表 2】ジョリー・フォニックス
42 のレターサウンド

注：野呂（2003）P.156

ｸﾞﾙｰﾌﾟ	基本の 42 レターサウンド
①	s, a, t, i, p, n
②	c/ck, e, h, r, m, d
③	g , o, u, l, f, b
④	ai, j, oa, ie, ee, or
⑤	z, w, ng, v, *short*oo, *long*oo
⑥	y, x, ch, sh, *voiced*th, *unvoiced*th
⑦	qu, ou, oi, ue, er, ar



【図 5】 ジョリー・ソング

注：Jolly Songs(2005) P. 1

日本においても 1980 年ごろからフォニックスの研究がなされてきた。その中でも児童英語教育の第一人者である松香洋子は，日本で初めて本格的にフォニックス学習を導入し，1979 年に松香フォニックス研究所[1]を設立した。松香（1981）は表 3 のように，10 級から 1 級までのルールを提唱している。松香のフォニックスルール（以下，松香フォニックス）では，文字と音の関係が一定で例外の少ない子音など規則性の高い文字から順に学習し，多くの発音を持つ母

[1] 松香洋子が，日本でフォニックスを広めるために設立。2014 年 1 月 1 日に，「株式会社 mpi 松香フォニックス」と社名変更。mpi とは Matsuka Phonics Institute の略。

音では，最も代表的な音から学習を始めていく。使用頻度の高い規則をしっかりと教え，不規則に耐えるだけの力がついてから，不規則を扱うので合理的である。松香フォニックスでは一番役に立つルールから学ぶことで，負担に感じることなく，自然な形で正しい発声や発音を身につけることができ，文字を読んだり，聞き取ったりできることを目的としている。

【表 3】松香によるフォニックスのルール

注：松香(1981)「英語、好きですか」

級	規則	発音の仕方	スペリング・文字
10	6 つの子音	文字と音の関係が一定 いとこ子音（無声音と有声音）	p, b, t, d, k, g
9	短母音	母音の中でも代表的な音	a, e, i, o, u
8	一文字子音	文字と音の関係が一定	m, n, f, v, s, z, c, g, l, r, q, x, h, w, j, y
7	e の付いた母音	母音が名前読みになり，e は発音しない	a-e, e-e, i-e, o-e, u-e
6	二文字子音	２つの子音で１つの音を表す	ch, sh, wh, th, the, ph, ck, ng
5	礼儀正しい母音	前の母音が名前読み，後ろの母音が無音	ai, ay, ee, ea, ey, oe, oa, ie, ow, ui, ue
4	連続子音	それぞれの音を密接させて，短めに続けて発音する	bl, cl, fl, gl, pl, sl, br, cr, dr, fr, gr, pr, tr, sc, sk, sm, sn, sp, st, spr, str, sw, tw
3	二文字母音	２つの母音で１つの音を表す	au, aw, oi, oy, ou, ow, oo, oo, ew
2	うめきの母音	r が母音と混合され，母音の音が微妙に変化する	ar, or, war, er, ir, ur, wor, er, ar, or, air, are, ear, eer, ire, our, ore
1	音なし子音	発音されない子音	kn, wr, mb, dge, tch, igh, bb, dd, ff, ll, mm, pp, rr, ss, tt

近年多くのフォニックス教材があるが，本研究では，前述した松香フォニックスとジョリー・フォニックスに注目したい。その理由として，第一に児童向けに研究されていることが挙げられる。フォニックスは規則を教える指導法であるため，子どもにとって退屈な内容になりかねない。しかしこれらの教材は，子どもが楽しめる方法で，文字と音との関係に自然に触れることができる工夫がなされている。文字と音との関係を歌やチャンツなどを通して学ぶことで，フォニックスの規則を自然に身につけていくことができる。

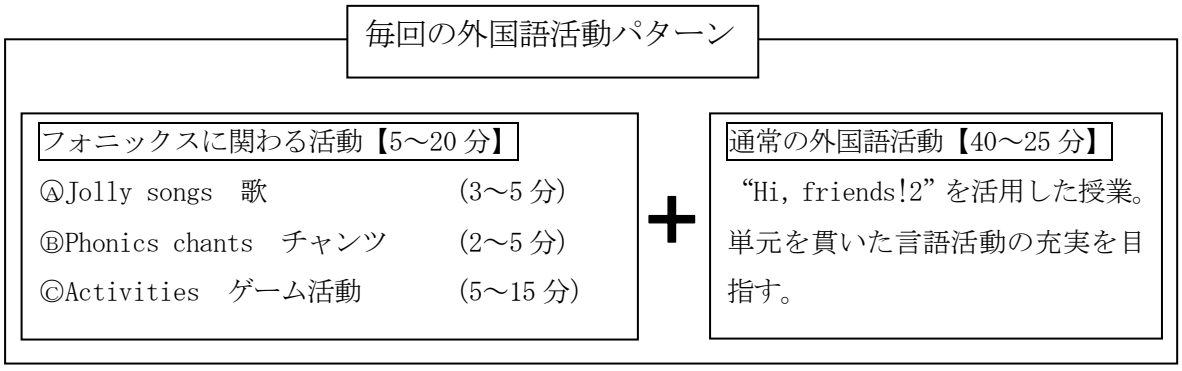
第二に，松香フォニックスやジョリー・フォニックスには有効性が確認されていることである。これらのフォニックス・ルールの有効性を研究した渋谷（2011）の報告によると，フォニックスのルールを使うと，中学校検定教科書で使用されている高頻度の名詞の 80%を発音することが可能であり，松香フォニックスの 10 級から 8 級のルールを使うだけで発音できる単語は 65%以上であるという結果であった（P. 120～121）。また，今年度発足した大阪府の小・中

学校の英語教育改革プロジェクトチームが松香フォニックスの教材を採用していることからも，その有効性は注目されていることが伺える。教育家庭新聞（2013）によると，「(大阪府教育委員会は）小学校では，中学の英語教育が成功していない原因が『正しい音を教えない指導方法にある』との前提で,「音」と「綴り」を連動させて学ばせる指導方法を取り入れる」(P.10)とある。その取り組みの一環として，大阪府は小学校でフォニックス指導を導入する試みを始めており，その教材は松香フォニックスのものである。

以上のような理由から，本研究では，松香フォニックスのルールに基づいて，ジョリー・フォニックスの要素も取り入れた実践プログラムを計画していく。

⑶ フォニックスを取り入れた小学校外国語活動

フォニックスに関する活動を取り入れていく授業モデルを，図6のように考えた。文部科学省が配布した副読本“Hi,friends！2”を活用する通常の外国語活動とあわせて，帯の活動として構成していく。フォニックス指導を行うにあたって重要なことは，文字と音との関係を継続的に意識させることである。そのため，ⒶJolly songs（以下，ジョリー・ソング）とⒷPhonics Chants（以下，フォニックス・チャンツ）に加え，ⒸActivities（以下，ゲーム活動）といった3つの活動の中にフォニックスの要素を取り入れ，毎時間5〜20分程度行っていく。



【図6】 フォニックスの活動を取り入れた授業モデル構想図

Ⓐジョリー・ソングは，ジョリー・フォニックスの教材の1つの歌である。42のレターサウンドの歌を歌いながら，また体の動きをつけながら，学んでいく。

Ⓑフォニックス・チャンツは，松香フォニックスのルールに基づいたチャンツである。CDのリズムに乗りながら，AからZの順番で，アルファベットの文字と音とを1文字につき1音ずつ対応させていく。例えば「A says “a,a” apple.（エイ　セズ　“ア，ア”　アップル)」というように，“A”は「エイ」という名前で「ア」という発音をするという意識をつけていく。

Ⓒゲーム活動では，フォニックスのルールを応用したゲームや活動を行う。(資料⑦参照)

以上のような活動を，全10回行っていく計画を表4のように立てた。今回は，先述した渋谷（2011）の研究において有効性が高いとされている，松香フォニックスの10級から8級までのルールを原則とし，ジョリー･ソングも取り入れていきながら，自作の教材やゲーム活動などを行っていく。チャンツや歌といった活動を通して，楽しく自然な形で児童がフォニックスに慣れていけるようにする。そしてゲーム活動では，ルールを定着させるとともに，そのルールを活用していけるように工夫する。しかし，文字を書く指導までは十分に行う時間がないことと，子どもたちの負担を考慮して，今回は書く指導までは行わず，英語でのコミュニケーション能力の素地づくりの一つとしての「聞く」と「読む」に限定する。

【表4】活動計画表

回	Ⓐジョリー・ソング	Ⓑフォニックス・チャンツ	Ⓒ ゲーム活動
1	S・A	フォニックス・チャンツ①（A～I）	キーワードゲーム
2	T・I	フォニックス・チャンツ①（J～R）	キーワードゲーム・ミッシングゲーム
3	P・N	フォニックス・チャンツ①（S～Z）	キーワードゲーム・カルタ取り
4	C／K	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	神経衰弱・文字探し①
5	＊復習	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	ペア探しゲーム・文字探し②
6	E・H	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	チェーンゲーム・文字探し③
7	R・M	フォニックス・チャンツ②（A～Z）	キーワードゲーム・ミッシングゲーム
8	D・G	フォニックス・チャンツ②（A～Z）	カルタ取り
9	O・U	フォニックス・チャンツ②（A～Z）	神経衰弱
10	＊復習	フォニックス・チャンツ②（A～Z）	ペア探しゲーム

2　研究の方法

(1)　調査対象

四日市市内のA小学校に研究を依頼し，6年生1クラス（27名）を調査対象として研究を進める。A小学校は，全校児童400名，学級数16学級の中規模校である。調査対象である6年生は，5年生の時には専科教員が外国語活動を指導しており，英語に対して意欲的である。しかし，英語塾等に通っている児童は27人中5人と多くない。通塾率が低いことから，純粋に実践による効果を検証しやすいと考える。また1クラスの人数が27人と少なく，授業中の様子や活動の実態を把握しやすい。実践前・実践後のテストも，一斉だけでなく個別の聞き取り・読み取りテストを行うことが可能なので，フォニックスによる効果の検証をより正確に行うことができる。

さらに，調査対象を6年生としたのは，フォニックス指導の導入時期も重要であると考えたからである。フォニックス指導開始時期として，①音声の指導を十分に行ってから②アルファベットを指導してからの2点を重視した。昨年度から正式に外国語活動が必修化されたため，

これまでの外国語活動において，ある程度英語の音声に慣れ親しんでいる。5 年生の時にアルファベットの小文字を，6 年生の 4 月にアルファベットの大文字を学習しており，アルファベットの名前読みについては知識がある。以上のことから，今回は 6 年生の 2 学期に検証授業を行うこととする。

また，今回は，実践前・実践後テストと全 10 回の授業全てを研修員が行う。ＨＥＦ（派遣英語指導員）は，毎回ではないが日程の合う限り，Ｔ２として授業に関わり，学級担任である研究協力員は，授業を参観する。

⑵ データの収集と分析

以下のような方法で，データの収集と分析を行っていく。

① 児童アンケート【資料①】

実践前（7 月）に調査対象となる 6 年生の児童へのアンケートを行い，外国語活動に関する興味・関心や学習意欲を把握する。同時に，英語を聞く力・読む力などが身についているか，自己評価させる。また，興味のある外国語活動の内容を把握することで，フォニックスを取り入れた外国語活動の方向性や，手立てを探るための参考資料とする。

＜質問項目＞

１．英語の授業は好きですか。

２．英語の授業に進んで参加していますか。

３．英語を聞き取ることができますか。

４．英語の単語をみて読むことができますか。

５．英語の単語をみて意味がわかりますか。

６．英語が使えるようになりたいですか。

７．英語の授業で楽しいと思うことは何ですか。（複数回答可）

①英語の歌を歌うこと　②英語のゲームをすること　③英語で友達と会話すること

④外国のことについて学ぶこと　⑤日本語と英語のちがいを知ること

⑥英語を読むこと　⑦英語を書くこと　⑧英語でスピーチすること

８．【実践前のみ】これからの英語でどんなことがしてみたいですか？

【実践後のみ】フォニックスを学習して，どんな力がついたと思いますか？

検証授業実践後（11 月）に，同じ内容でアンケートを行い，児童の外国語活動への興味・関心や学習意欲がどのように変容したか，また英語を聞く力と読む力の自己評価を分析し，その効果を検証する。実践後は，フォニックス指導の効果を質問する項目を追加し，さらに具体的にその効果を検証する。

② 聞くテスト（一斉・個別）【資料②③】

聞き取った音からアルファベットの文字を認識できる力を測るために，聞くテストを行う。一斉テストでは，聞き取った音に当てはまるアルファベットの文字に丸をつける。個別テストでは，聞き取った音をアルファベットの一覧表から指差したり，カードの中から選んだりする。検証授業実践前と実践後に同じテストを行うことで，文字と音の結びつきをどの程度認識できているかについて，効果を検証する。

聞こえたアルファベットや単語を１つ選ぶ。

【聞くテスト（一斉）】

①	b	e	g	a	d
②	k	m	u	j	n
③	r	w	o	q	l
④	f	p	z	t	s
⑤	y	h	c	x	i

①	egg	pig	ink	ant
②	bear	hand	lion	nest
③	rabit	girl	yard	fish
④	cat	cut	cap	cup
⑤	map	mop	mug	man

聞こえたアルファベットや単語を１つ選ぶ。

【聞くテスト（個別）】

①	p	b
②	t	d
③	k	g
④	f	v
⑤	l	r

①	sun	dog	jam	key
②	witch	question	monkey	zebra
③	bag	big	pig	bed
④	pot	dot	pop	top
⑤	fax	box	tax	fox

③ 読むテスト（個別）【資料④⑤】

アルファベットや単語を読むことができる力を測るテストを行う。個別で，提示されたアルファベットの文字や単語を発音できるかを実践前と実践後とで行うことで，フォニックス指導によって，児童の読む力がどのように変容したかを測り，効果を検証する。

さらに実践後のみ，チャレンジ問題を４問追加する。授業で扱っていない単語を読むことができるか測ることで，フォニックス・ルールを活用する力がついたか検証する。

アルファベットや単語を１つずつ発音する。

【読むテスト】

①	a
②	e
③	w
④	p
⑤	h

①	apple
②	socks
③	ten
④	doctor
⑤	octopus

【実践後チャレンジ問題】

①	banana
②	melon
③	insect
④	alligator

３　研究の計画

研究の計画は以下の通りである。

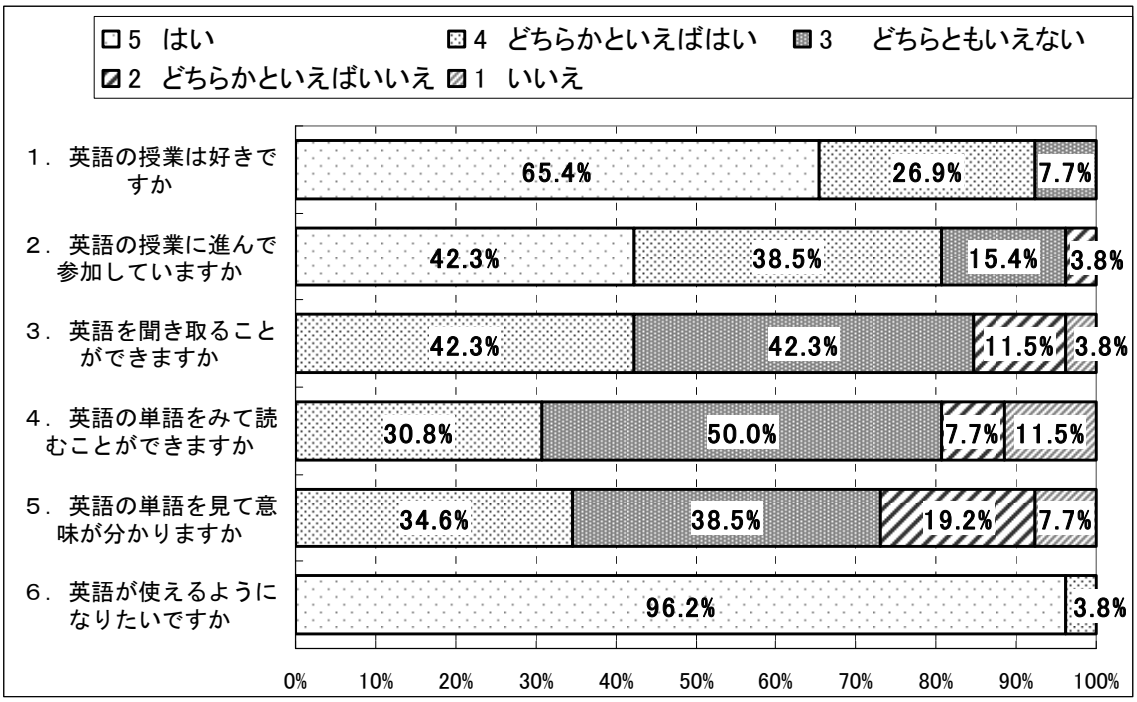
月	本研究に関しての計画・実施する内容	研究協力校との連携
４	課題研究打合せ会 【研究主題，研究の構想】	
５	第１回課内研究会議・第１回国研指導 【研究とは，研究主題，研究の構想，主題設定の理由】	
６	第２回課内研究会議 【主題設定の理由，研究の内容と方法】	研究協力校へ依頼 聞き取り調査・視察
７	第３回課内研究会議・第２回国研指導 【実践の内容，計画等】	実践前児童アンケート実施 実践前聞く・読むテスト実施
８	調査の集計と分析	検証授業の準備
９	第４回課内研究会議 【実践の内容，計画等，実践の経過報告】	検証授業①～④
１０		検証授業⑤～⑨
１１	調査の集計と分析・検証のまとめ	検証授業⑩ 実践後児童アンケート実施 実践後聞く・読むテスト実施
１２	第５回課内研究会議・第３回国研指導・第６回課内研究会議 【主題設定の理由～結果と考察，研究のまとめに向けて】	検証のまとめ・考察 研究のまとめに向けて
１	第７回課内研究会議・第４回国研指導 【主題設定の理由～成果と課題】	
２	第８回課内研究会議 【すべて（はじめに，奥付等を含む），表示・誤字等のチェック】	

Ⅴ　結果と考察

1　児童の英語活動に関する事前調査から

⑴　英語に関する関心・意欲・態度

児童の英語に関する実態を知るために行った実践前アンケートの結果は,図７の通りである。

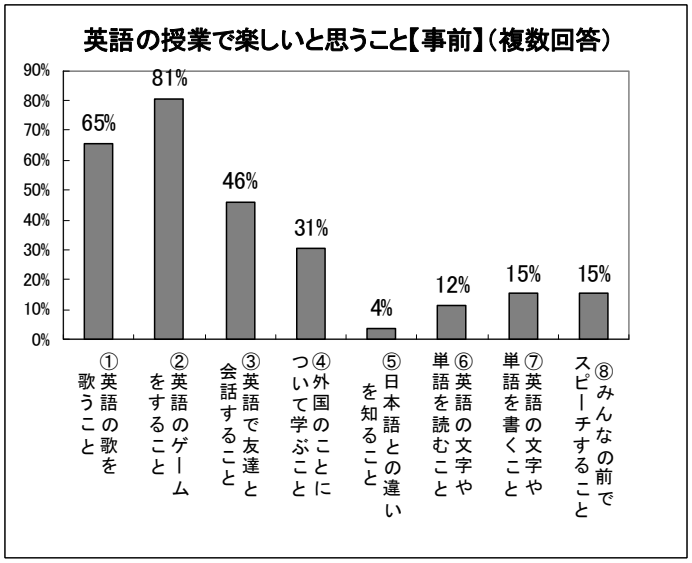


【図 7】児童アンケート＜実践前＞

実践前児童アンケートの結果から，児童の英語に対する関心・意欲は高いという結果がみられた。図７を見ると,「1．英語の授業が好きですか」という質問に,「好き」または「どちらかといえば好き」と 90%以上の児童が回答し,「好きではない」「どちらかといえば好きではない」と回答した児童は一人もいなかった。また,「2．英語の授業に進んで参加していますか」の質問にも，同様の結果が出ている。さらに,「6．英語が使えるようになりたい」と回答した児童は 96.2%で，英語活動に対する期待が大きい。

しかしながら，英語を聞いたり，読んだり，意味が分かったりといった技能面になると自信が持てないという児童が多い。「3．英語を聞き取ることができますか」「4．英語の単語を見て読むことができますか」「5．英語の単語を見て意味が分かりますか」の質問に対して「はい」と回答した児童は 1 人もいなかった。「どちらかといえばはい」と回答した児童も半数以下であり,「どちらかといえばいいえ」か「いいえ」と回答した児童も，１・２・６の項目に比べるとかなり多い。自分の英語力がどれくらいなのか客観的に判断したことがないということもあるが、英語力が定着しているという実感が薄いという実態がみられた。

また，どのような英語活動が好きかというアンケートにおいては，図８のように「英語のゲームをすること」や「英語の歌を歌うこと」といったように楽しんで行える活動に回答が集中していた。「英語の文字や単語を読むこと」は 12%で,「スピーチをすること」は 15%で，回答率が低いことが伺える。英語活動に対して肯定的な気持ちを持っているが，少し難しい内容には消極的な傾向にある。そのため，英語活動に対する意欲は高いものの，自己評価としても英語を読む力や話す力はついていないと感じている児童も少なくない。

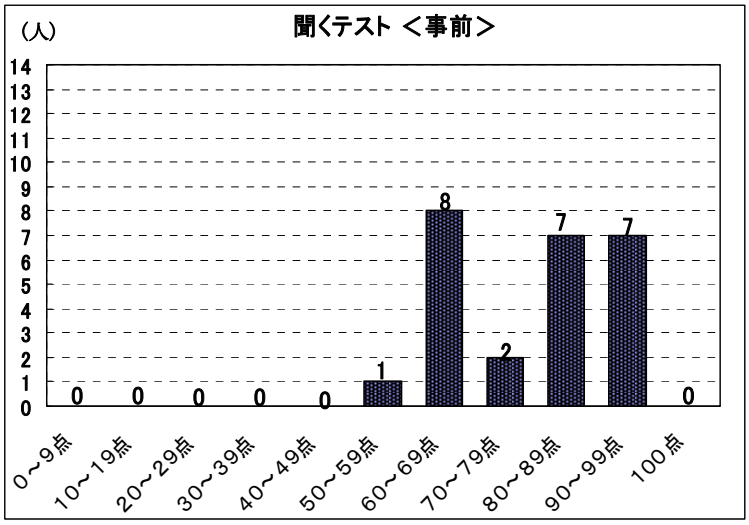


【図８】児童アンケート＜実践前＞②

⑵　聞く力の実態

聞くテストでは，一斉と個別で，アルファベットと単語をそれぞれ５問ずつ出題した。どちらもリスニングテストの要領で，教師の発音した文字や単語を選択肢から選ぶことができたら正答とした。

児童の英語を聞き取る力は，ある程度ついていることが分かった。図 9「聞くテスト」の結果を見ると，50 点未満の児童は１人もおらず，ほとんどの児童が，聞き取った音からそれがどのアルファベットの文字や単語を表しているのかをほぼ認識できていることが分かる。また，表５を見ると，アルファベットと単語とを平均すると約 75%の正答率だった。特に，jam，monkey，girl，cat などの正答率は，それぞれ 92%，88%，84%，84%と比較的高かった。これらは，日常生活でその綴りを目にする機会が多かった単語や，これまでの外国語活動で学習したことがあった単語などで，単語の認識につながったと考えられる。



【図 9】聞くテスト結果＜実践前＞

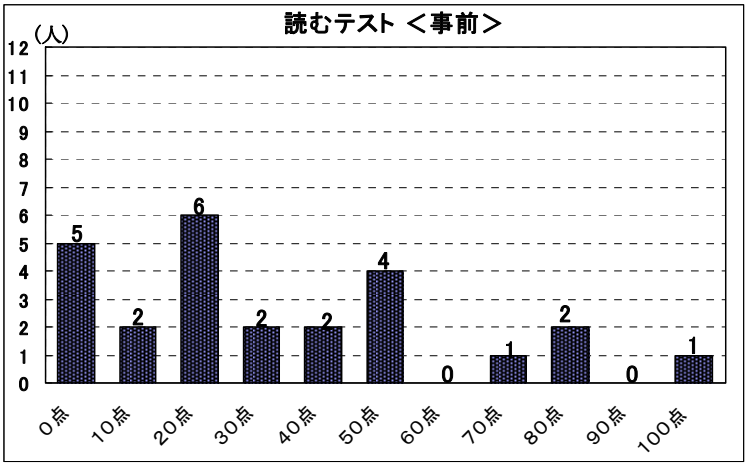
【表 5】聞くテスト結果＜実践前＞②

聞くテスト①	d	m	r	s	c	b	t	g	f	l	平均
正答率	56%	92%	52%	84%	84%	92%	100%	100%	84%	20%	76%
聞くテスト②	ink	hand	girl	cat	man	jam	monkey	bag	top	box	平均
正答率	84%	68%	84%	84%	48%	92%	88%	68%	64%	72%	75%

しかし，それだけでは十分に聞く力が定着しているとは言えない。特に r，l，d，man の正答率は低く，それぞれ 52%，20%，56%，48%であった。r と l などの正答率が低かったのは，日本語の発音にはない発音で，その区別をすることが難しいとされているためと推測できる。d は選択肢の中に，文字の形が似ている b が含まれていたことが，誤答を招いたと考えられる。man に関しても，選択肢が map や mug などの綴りの似た単語ばかりであったことが，正答率の低さの原因の一つになったと考えられる。このことから，発音を聞いてどの文字や単語を表しているかは，これまでの経験でなんとなく答えることはできるが，文字と音の結びつきの正確さには欠けていることが明らかになった。

⑶ 読む力の実態

読むテストは個別で行った。提示されたアルファベットや単語が発音できれば正答とした。例えば，a の文字を見て，/a/またはそれに近い「ア」の発音ができたら「1. 正答」とし，「エイ」とアルファベットの名前の読み方をした場合は「3. アルファベット読み」とした。それ以外の間違った読み方をした場合は，「4. 読む努力あり」とし，全く何も答えることができずパスした場合は，「2. 無回答」とした。



【図 10】　読むテスト結果＜実践前＞

【表 6】　読むテスト結果＜実践前＞②

実践前	a	e	w	p	h	apple	socks	ten	doctor	octopus	平均
1. 正答率	32%	28%	16%	12%	20%	52%	36%	52%	20%	56%	32%
2. 無回答率	8%	8%	12%	12%	20%	36%	36%	32%	64%	28%	26%
3. ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ読み	60%	64%	72%	48%	44%	0%	0%	0%	0%	0%	29%
4. 読む努力あり	0%	0%	0%	28%	16%	12%	28%	16%	16%	16%	13%

聞くテストに対して，読むテストの正答率はかなり低い。図 10「読むテスト結果」から，1問も正答できなかった児童が 5 人いることが分かる。全体の半数以上が 50 点未満であり，70点以上を取った 4 人は英語を習っているという児童であった。表 6 からは，平均正答率は 32%と低いことが分かる。アルファベットの名前読みが 29%で，間違っていても何とか努力して読もうとした回答が 42%あったが，無回答も 26%あった。これまでの外国語活動では，聞く活動に対して読む活動は少ないため，聞く力に比べて読む力は定着していないと言える。

2　フォニックス指導実践

フォニックスに関わる活動は，表 7 の通り全 10 回行った。

【表 7】　フォニックス実践のまとめ

回	日程	Ⓐ歌	Ⓑチャンツ	Ⓒ ゲーム活動	Hi,friends! 2
1	9/ 5	S・A	A・B・C・D・E・F・G・H・I	キーワードゲーム	L 5　Let's go to Italy① p.18 Let's play　(国名) p.19 Let's listen　(世界遺産)
2	9/12	T・I	J・K・L・M・N・O・P・Q・R	キーワードゲーム ミッシングゲーム	L 5　Let's go to Italy② p.19 Let's play 2 (国旗クイズ) p.20 Let's listen 2 p.20 Let's Chant
3	9/19	P・N	S・T・U・V・W・X・Y・Z	キーワードゲーム カルタ取り	L 5　Let's go to Italy③ p.20 Let's play 3 p.20 Where do you want to go?
4	9/26	C／K	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	神経衰弱 文字探し①	L 5　Let's go to Italy④ 自分の行きたい国を紹介しよう！
5	10/ 3	＊復習	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	ペア探しゲーム 文字探し②	L 5　Let's go to Italy⑤ 入国審査！外国旅行へ行こう！
6	10/10	E・H	A～Z／文字だけ提示するチャンツ	チェーンゲーム 文字探し③	L 6　What time do you get up?① p.22 Let's play　(数字) p.22 Let's listen　(時計)
7	10/17	R・M	別の単語に置き換えたチャンツ	キーワードゲーム ミッシングゲーム	L 6　What time do you get up?② p.22 Let's play 2 p.23 Let's listen 2　(時刻)
8	10/24	D・G	別の単語に置き換えたチャンツ	カルタ取り	L 6　What time do you get up?③ p.23 Activitiy 1　(一日の行動) p.24 Let's listen 3 (世界の時刻)
9	11/ 1	O・U	別の単語に置き換えたチャンツ	神経衰弱	L 6　What time do you get up?④ p.24 Let's Chant p.25 Activity 2　(わたしの一日)
10	11/ 7	＊復習	別の単語に置き換えたチャンツ	ペア探しゲーム	L 6　What time do you get up?⑤ わたしの一日をスピーチしよう！

(1) ジョリー・ソングの実践

今回導入したジョリー・ソングは15曲であった（資料⑥参照）。授業の始めにウォームアップも兼ねて前回までに習った歌を歌ってから，ほぼ毎回新しい歌を 2 曲ずつ導入していった。途中で2回，好きな歌をリクエストさせて選ぶ復習タイムの機会も持った。実際に行ってみると，子どもたちの反応は大変良く，歌を歌うことを楽しんでいる様子だった。休み時間に CD を流しておくと，子どもたちが近くによってきて口ずさむ姿もみられた。

このようにジョリー・ソングが子どもたちにとって親しみやすく，フォニックス読みに慣れさせるのに効果があった理由として，次の三点が挙げられる。

第一に，ストーリー性である。ネズミやヘビといったキャラクターたちが繰り広げる物語は分かりやすくて，面白い。今回は，曲に合わせて電子黒板で絵を表示した。可視化することにより，内容の理解を促すことができ，子どもたちの興味・関心をより高めることにつながった。

第二に，曲の短さである。1曲が数十秒と短いため，1回の授業で繰り返し歌うことができることで定着につながった。s や a の歌のように，もともと繰り返しが多い曲はもちろんのこと，i のように，テンポが速く歌詞も難しいかと思われた曲でも，ほとんどの子どもが歌えるようになっていった。

【図 11】アクションをつけて歌う児童たち

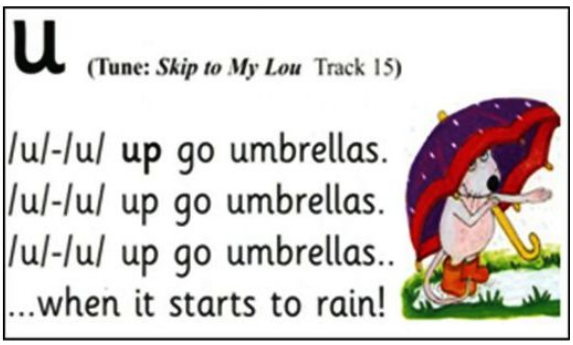
第三に，動作化である。歌を歌うときに，子どもたちはアクションの部分をとても楽しんでいた。誰が一番上手に s の形を作れるか，アリを振り払えるかというアクションの上手さを競いながら，大きな声で s や a を発音する姿も見られた。このように，単に歌うだけでなくアクションに合わせて発音することで，五感を使って記憶することができ，自然な形でフォニックスの発音が定着していった。

さらに，ジョリー・ソングを歌うことで，日本語との違いに気づく場面があった。

第4時で導入した c/k の歌は，1曲の中で1番が c で2番が k となっている。図 12 に示した歌詞の「/c/-/c/-/c/」の部分と「/k/-/k/-/k/」の部分は同じ「ク-ク-ク」と発音する。c と k は違う文字なのに同じ「ク」と発音をすることに，子どもたちは驚いている様子だったが，castanets の c と kites の k は同じ発音をするということに結びついていった。

【図 12】c/k の歌　　注：Jolly Songs (2005) P. 4

また第９時でｕの歌を歌った時，ある児童が「ａとｕは同じ発音なのか」と質問した。図 13 に示したように，ａとｕは同じ「Skip to My Lou」という曲を使っており，ａもｕもカタカナ表記では同じ「ア」となる。しかし，実際には，ａの発音は口を横に開いてあごを下げながら「ア」と言う音で，ｕの発音は驚く時に出す短い「アッ」の音といった違いがある。そこで 2 曲を聴き比べてみることで，日本語にはない微妙な違いに気づくことができた。



【図 13】ａとｕの歌　　注：Jolly Songs(2005) P. 1，P. 8

このように，ジョリー･ソングを通して，違う文字でも同じ発音であったり，同じ「ア」でも，発音に微妙な違いがあったりなど，日本語にはない英語のルールに触れることができた。

⑵　フォニックス・チャンツの実践

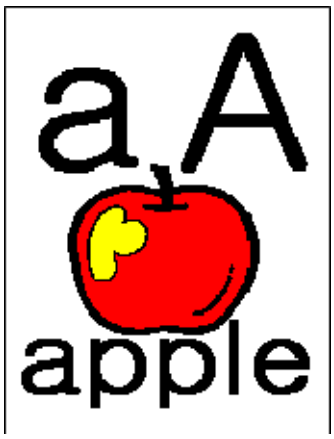
フォニックス・チャンツでは，松香フォニックスのＣＤの「Active Phonics」の「Phonics Alphabet」の曲のリズムに合わせて，A から Z までのチャンツを毎回繰り返し行った。まず 1 回目から 3 回目までは， A から Z までの発音の仕方を 8～9 文字ずつ導入した。次に，4 回目から 6 回目までは，曲に合わせてフォニックス・チャンツ①（図 14）を繰り返し行った。そして，7 回目からは，フォニックス・チャンツ②（図 15）として別の単語に置き換えたチャンツを行った。例えば，apple を ant に，bear を bag のように単語のみ変えて，同じリズムでチャンツを行っていった。

【図 14】ﾌｫﾆｯｸｽ･ﾁｬﾝﾂ･ﾁｬｰﾄ①

【図 15】ﾌｫﾆｯｸｽ･ﾁｬﾝﾂ･ﾁｬｰﾄ②

フォニックスのルールを教え込むというよりは，チャンツのリズムに乗って音を繰り返し発音していく中で，自分自身でその規則性に気づいていくことができるような指導を目指し，次のような点に留意した。

1 点目に，チャンツを行う際には，必ず図 16 のようなフラッシュカードを全体に提示した。フラッシュカードは 1 つの単語ごとに，アルファベットの小文字と大文字，絵，単語がセットになっている。そのため，アルファベットの文字や単語の音だけでなく，その綴りと意味も同時に確認することができた。また，個人用のプリントとして，フラッシュカードと同じものを一覧表にしたフォニックス・チャンツ・チャート①（図 14）を配付することで，後で述べるゲーム活動時などに自分自身で確認することができるようにした。



【図 16】フラッシュカード

2 点目に，後半は絵のない，文字だけのフラッシュカードを活用したことである。1 点目で述べたことと逆になるが，絵がないということはヒントがないということである。最初のうちは絵を手がかりにして，文字と音とを結び付けていくことが可能になるが，絵がなくても確実に発音できなくては，真に文字と音とが結びついているということにはならないからである。

【図 17】文字だけのフラッシュカードの提示

3 点目に，オリジナル教材として図 15 に示したようなフォニックス･チャンツ②を作成した。フォニックス・チャンツ①で学んだ 1 文字に対して 1 音の規則が，他の単語にも応用できることを実感させ，さらに定着させるためである。フォニックス・チャンツ②を作成するにあたり注意した点は，できる限り単語に使われている全ての文字が，松香フォニックスの 10 級から 8 級のルールに適応しているように選んだことである。例えば a の場合，母音であるため多くの発音があるが，1 文字に 1 音の規則が定着している子どもたちにとって，その発音は「ア」のみとなる。air や cake などは，a を「エィ」と発音するため，子どもたちには理解できず，混乱させてしまう可能性がある。そのため，ant のように 10 級から 8 級のルールで適応できる単語を選ぶようにした。bag や cat など複数の単語に a が含まれているが，「ア」以外の発音になる単語は選ばないようにすることで，基本的なルールをしっかりと定着させた。

以上のような点に留意しながら，フォニックス・チャンツを行っていった。最初は間違える児童もいたが，徐々に慣れていき，文字と音との関係を自然に身につけることができた。さらに，ジョリー・ソングと同様に，apple の a と umbrella の u は違う発音であるなど英語特有のルールに気づく場面がみられた。bag と bug は a と u だから違うなど，ジョリー・ソングでの気づきを活かした発言もみられた。

⑶　ゲーム活動の実践

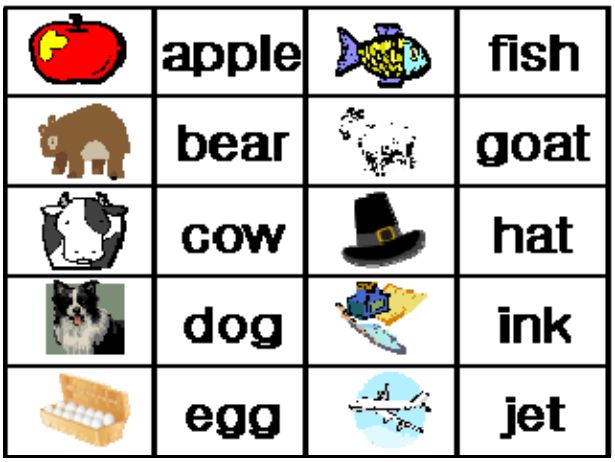
図 8「児童アンケート＜実践前＞」にもあったように，英語でゲームをすることを楽しいと答えている児童は 81％もいる。そのため，ゲーム活動を取り入れていくことで，子どもたちが主体となって進んで活動する機会となり，効果的だと考えた（それぞれのゲームのルールや内容の詳細については，資料⑩を参照）。しかし，ゲーム活動は，単に楽しいだけではなく，ねらいをもって取り入れていく必要がある。初期の段階は，フォニックス・ルールの定着を図るために，反復練習を目的とするゲームが主体となった。そして，ある程度ルールが定着してきた段階では，ルールを活用するゲームを多く取り入れていくことにした。

①　キーワードゲーム

初期の段階において，フォニックス読みに慣れさせるために，発音のリピート練習が主体とならざるを得ず，単調な活動となり，子どもたちの興味やモチベーションを継続させにくいと考えられる。そこで，キーワードゲームを行うことは，活動が単調にならず，全体で行ったり，ペアで行ったりなどの変化をつけることもできる。単なる繰り返しの発音練習に留まらず，発音をよく聞いてどの文字を表しているのかを判断する必要があるため，聞く力を育成することもできる。

②　カルタ取りゲーム

自作教材として，図 18 のように，フォニックスの単語と絵がセットになったカードを各グループに 1 セットずつ用意した。このゲームでは，発音を聞き取って，それがどの文字を表しているのかを素早く判断することが必要になる。つまり，聞く力と読む力を定着させることができる。



【図 18】　カード

③　神経衰弱ゲーム

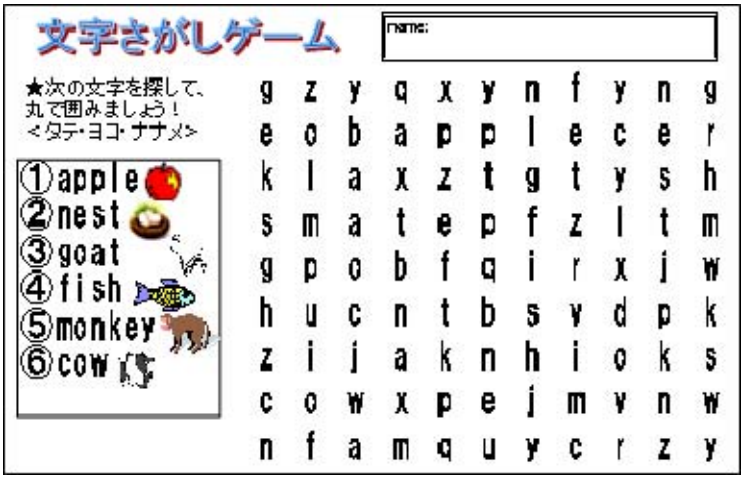
図 18 のカードを使用して，トランプの神経衰弱の要領で行う。このゲームでは，めくったカードの文字と意味とが分かる必要がある。そのため，単語を見て文字を読む力を定着させるだけでなく，その意味も合わせて認識させることができる。さらに今回は，めくったカードは，グループ全員で発音することをルールとした。グループ全員で発音するので，互いに教え合うことができ，発音練習の機会も増える。そうすることで，文字と音とをより結びつけることができるようにした。

④　ペア探しゲーム

これも図 18 のカードを使用して，トランプのジジ抜きの要領で行う。このゲームでは，引いたカードの文字と意味が分かる必要がある。そのため，文字を見て読む力を定着させるだけでなく，その意味も合わせて認識させることができる。さらに今回は，ペアになったカードを出す際には，発音することをルールとした。そうすることで，発音練習の機会も増え，文字と音と意味をセットで学ぶことで，読む力をより定着させることができるようにした。

⑤　文字探しゲーム

単語というひとかたまりの認識だけでなく，一つ一つの文字に注目させることができる。その結果，それぞれの文字が集まって，一つの単語が形成されるということを認識させることができる。個人で行うことと，文字や単語の綴りをより正確に認識できていることを求められるために，カードを使ったゲームより高度な活動である。そのため今回は，ヒントとして単語の横に絵も載せることで，フォニックス・チャンツを連想させる工夫をした。



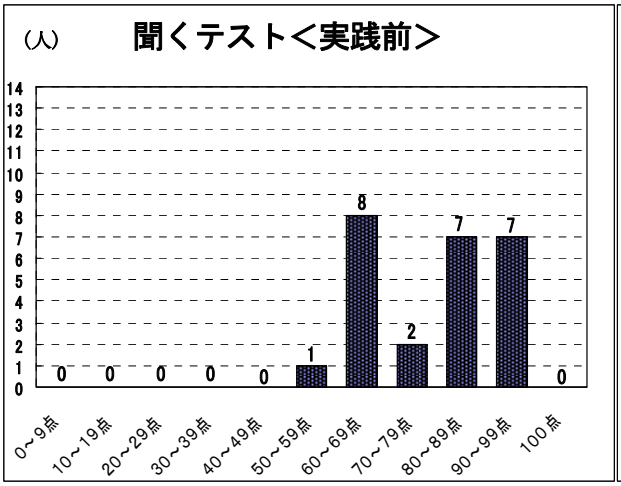
【図 19】　文字探しゲーム

これらのゲーム活動を通して，自然な形で反復練習を行うことができた。また，実際に活用することで，これまでに歌やチャンツなどで身につけたフォニックスのルールを，より定着させることができた。子どもたちの中には，分からない単語をフォニックス・チャンツ・チャートで調べたり，友達に聞いたりする姿がみられた。特にカードを使うことで，ゲーム性が高くなり，楽しみながら単語を読んだり，聞いたりする努力をすることができたと考える。その結果，単語の綴りや発音を意識するようになり，フォニックス・ルールの文字と音との関係をさらに定着させるために効果的であった。

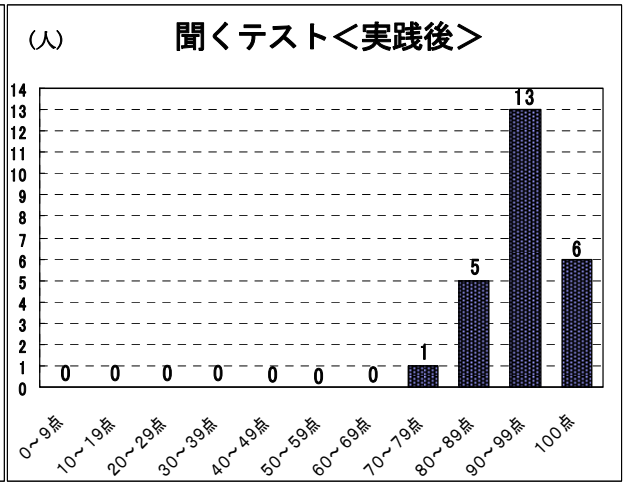
【図 20】ゲーム活動中の児童の様子

3　結果

(1)　実践前と後の聞く力の変容



【図 21】聞くテスト＜実践前＞



【図 22】聞くテスト＜実践後＞

【表 8】聞くテスト①＜実践前・実践後比較＞

聞くテスト①	d	m	r	s	c	b	t	g	f	l	平均
実践前正答率	56%	92%	52%	84%	84%	92%	100%	100%	84%	20%	76%
実践後正答率	80%	100%	76%	100%	100%	88%	100%	100%	100%	64%	91%

【表 9】聞くテスト②＜実践前・実践後比較＞

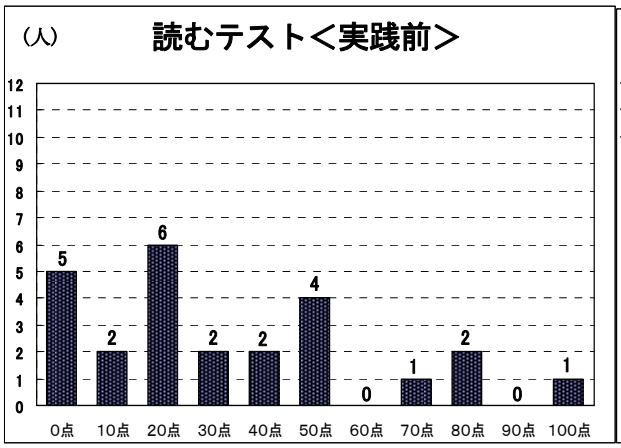
聞くテスト②	ink	hand	girl	cat	man	jam	monkey	bag	top	box	平均
実践前正答率	84%	68%	84%	84%	48%	92%	88%	68%	64%	72%	75%
実践後正答率	100%	100%	100%	96%	84%	100%	100%	92%	72%	84%	93%

聞く力は，フォニックスの実践前と実践後を比べると，大きく得点が伸びている。図 21「聞くテスト＜実践前＞」と図 22「聞くテスト＜実践後＞」を比較すると，90 点台が 7 人から 13 人へ，100 点も 0 人から 6 人へと増えていることが分かる。実践前には 9 人いた 70 点未満も一人もおらず，全体的に得点が上がっていることが読み取れる。

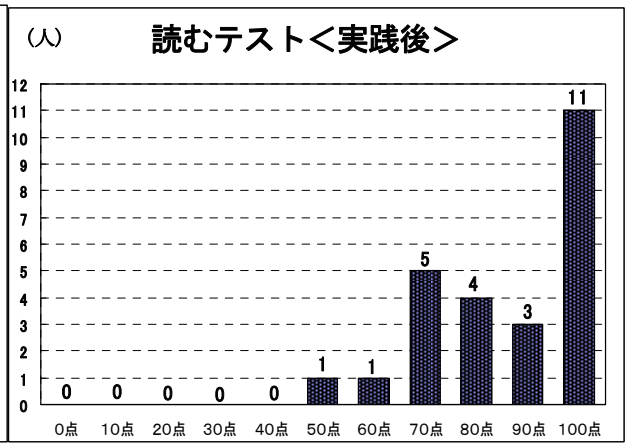
特に顕著だったのが，ｒと l の正答率の伸びである。表 8「聞くテスト①」を見ると，ｒは実践前に 52%の正答率だったのが，実践後には 76%に伸びた。 l では実践前は 20%の正答率だったのが実践後は 64%まで正答率が上がったように，大きな伸びをみせている。

以上のように，実践前と後の聞く力については，アルファベットと単語の両方において，大きな変容がみられた。

⑵　実践前と後の読む力の変容



【図 23】読むテスト＜実践前＞



【図 24】読むテスト＜実践後＞

読む力に関しては，聞く力よりも顕著な結果が出た。図 23「読むテスト＜実践前＞」と図 24「読むテスト＜実践後＞」を比較すると，全体的に得点が伸びていることが分かる。図 23 をみると，実践前では，ほとんどの児童の得点が 60 点未満で，特に 30 点未満に約半数が集中していた。それに対して図 24 では，児童の多くが 70 点以上の得点を取っており，半数以上が 90 点以上に集中している。特に 100 点は，実践前には 1 人だったのが，実践後には 11 人に増加している。

【表 10】読むテスト＜実践前・実践後比較＞

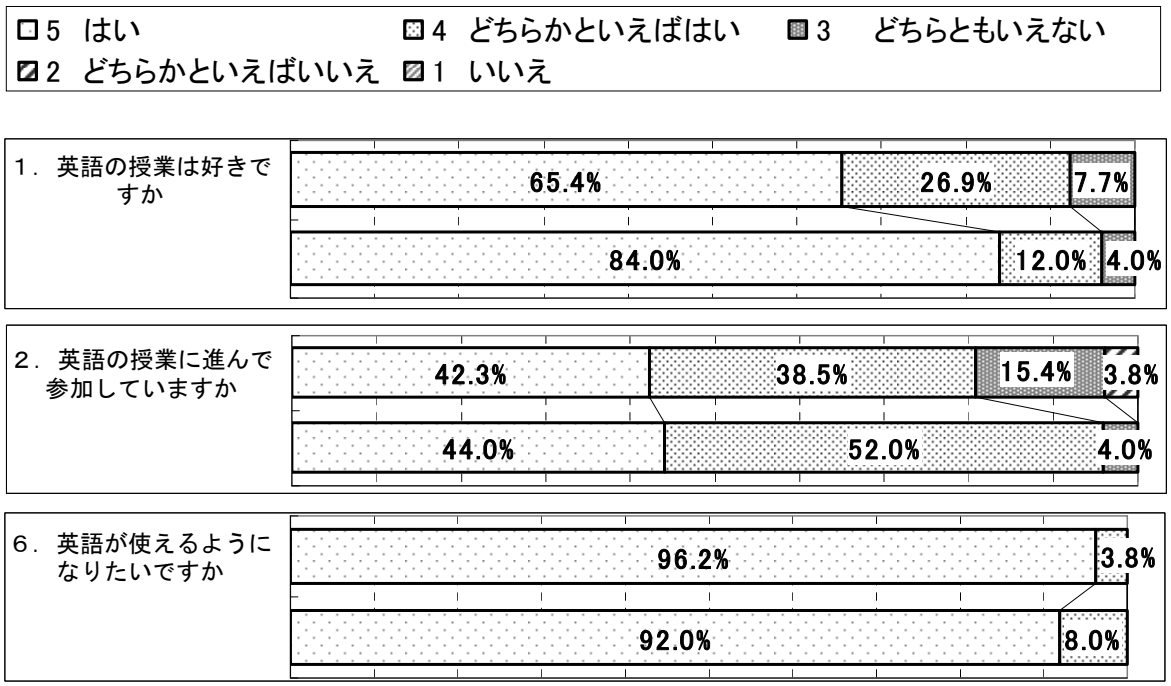
実践前	a	e	w	p	h	apple	socks	ten	doctor	octopus	平均
1. 正答率	32%	28%	16%	12%	20%	52%	36%	52%	20%	56%	32%
2. 無回答率	8%	8%	12%	12%	20%	36%	36%	32%	64%	28%	26%
3. ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ読み	60%	64%	72%	48%	44%	0%	0%	0%	0%	0%	29%
4. 読む努力あり	0%	0%	0%	28%	16%	12%	28%	16%	16%	16%	13%

実践後	a	e	w	p	h	apple	socks	ten	doctor	octopus	平均
1. 正答率	100%	96%	68%	72%	80%	76%	100%	92%	76%	100%	86%
2. 無回答率	0%	0%	12%	4%	8%	16%	0%	0%	16%	0%	6%
3. ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ読み	0%	4%	12%	24%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	5%
4. 読む努力あり	0%	0%	8%	0%	4%	8%	0%	8%	8%	0%	4%

このことは表 10「読むテスト＜実践前・実践後比較＞」からも同様の結果がみられる。表 10 の正答率をみると，実践前は 32%であったのが，実践後は 86%と伸びている。あわせて無答率をみると，実践前は 26%であったのが，実践後は 6%と下がっていることが分かる。また，単語ごとに注目してみると，socks と doctor では正答率の変容が顕著に表れている。socks については，実践前の正答率 36%から実践後は 100%に伸びた。doctor については，実践前の正答率 20%から実践後は 76%に伸びた。

以上のように，実践前と後の読む力については，実践後の方が大きく得点が伸びていることが分かった。

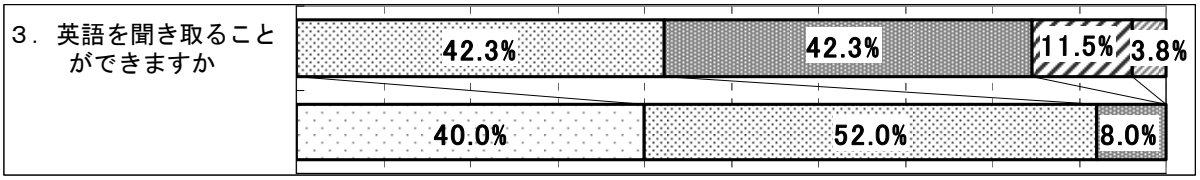
⑶ 実践前と後の児童の関心・意欲・態度の変容



【図 25】児童アンケート①＜実践前・実践後比較＞

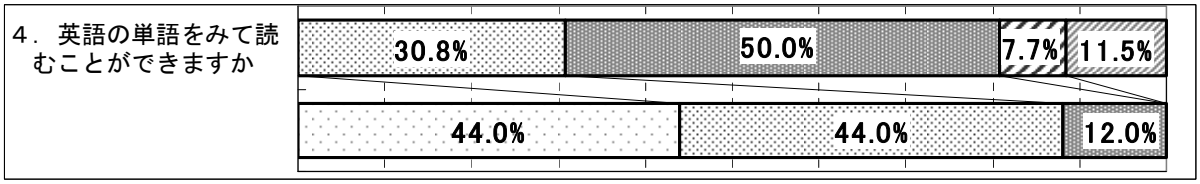
児童の英語活動に関する意識は、フォニックスの実践前に比べて高くなっている。図 25 児童アンケート①＜実践前・実践後比較＞の結果から，「1. 英語の授業は好きですか」という質問に対して，英語を好きと答えた児童は，実践前 65. 4%から実践後 84%と 19%増えた。また「2. 授業に進んで参加していますか」という質問では，実践前は「どちらかといえばいいえ」が 15. 4%，「いいえ」が 3. 8%いたのに対して，実践後はどちらも 0%であった。授業に進んで参加していない児童は１人もおらず、全員が「進んで参加」か「どちらかといえば進んで参加」していると答えた。「6. 英語が使えるようになりたいですか」の項目に関しては，実践前に比べて数値が下がったが，実践前から英語を使えるようになりたいという意欲は高く，実践後も

それは変わっていない。「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と答えた児童は，実践前も実践後も１人もいない。以上のことから，英語活動に対する関心・意欲は全般的に高くなったことが分かった。



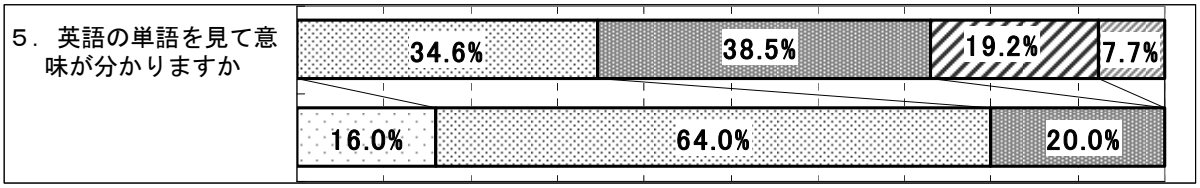
【図 26】児童アンケート②＜実践前・実践後比較＞

聞く力については，フォニックス実践前に比べて実践後のほうが自己評価の数値が大幅に上昇している。図 26 の結果から，「3. 英語を聞き取ることができますか」の質問に，実践前では「聞き取れる」と答えた児童は１人もいなかったのに対して，実践後では 40%に増加した。「どちらかといえば聞き取れる」と答えた児童も 42.3%から 52%に増加した。つまり，合計 92%の児童が，「聞き取れる」または「どちらかと言えば聞き取れる」と答えた。逆に，実践前には 11.5%が「どちらかと言えば聞き取れない」，3.8%が「聞き取れない」と答えていたが，実践後には１人もいなくなっていた。以上のようなことから，より聞き取れるようになったと答えた児童が増えたことが分かった。



【図 27】児童アンケート③＜実践前・実践後比較＞

読む力に関しても，聞く力同様，実践前より自己評価の数値が大幅に上昇した。図 27 の結果から，「4. 英語の単語をみて読むことができますか」の質問に，実践前では「読める」と答えた児童は１人もいなかったのに対して，実践後では 44%に増加した。「どちらかといえば読める」と答えた児童も 30.8%から 44%に増加した。つまり，合計 88%の児童が，「読める」または「どちらかと言えば読める」と答えた。逆に，実践前には 7.7%が「どちらかと言えば読めない」，11.5%が「読めない」と答えていたが，実践後には１人もいなくなっていた。以上のようなことから，より読めるようになったと答えた児童が増えたことが分かった。



【図 28】児童アンケート④＜実践前・実践後比較＞

さらに，読む力と聞く力に合わせて，英語の単語の意味も分かるようになったと答えた児童が増えている。図 28 の結果から，実践前では「意味が分かる」と答えた児童は１人もいなかったのに対して実践後では 16%増加した。80%の児童が，「意味が分かる」または「どちらかと言えば意味が分かる」と答えた。逆に，実践前には 19.2%が「どちらかと言えば分からない」，7.7%が「分からない」と答えていたが，実践後には１人もいなくなっていた。以上のようなことから，単語の意味の認識力が高くなったことが分かった。

また，実践後のアンケートでは，フォニックスの効果についても質問した。「フォニックスを学習して，どんな力がついたと思いますか。フォニックスを学習してわかったことやできるようになったことは何ですか。」という質問に対する児童の回答は，以下の通りだった。

・単語が読めるようになった。単語を読む力がついたと思うから，いろいろな単語を覚えたい。
・読む力と聞く力がつきました。
・発音がわかった。発音できるようになった。
・外出したときに英語が書いてあった時に，読めるようになった。
・文字と物をいっしょに覚えて，つづりと意味を覚えた。
・アルファベット 1 文字ずつの発音を覚えられた。
・1 学期に比べて，文字を見て発音できるようになった。読めるようになった。
・単語を見ても最初は読めなかったけど，フォニックスをして読めるようになったり，聞き取れるようになった。
・フォニックスをやって、1 つの文字に 2 通りの読み方があることがわかった。
・フォニックスの歌を歌っていたら，いつの間にか A～Z まで簡単に覚えていた。

以上のように，ほとんどの児童がフォニックスによる効果を実感していることが分かった。

⑷ フォニックス指導の効果

フォニックスの効果をさらに検証するため，学習していない新しい単語をチャレンジ問題として，実践後の読みのテストに加えた。前述の読むテストでは，フォニックス読みのアルファベット 26 文字とフォニックス・チャンツ①と②に出てくる 52 単語の中から出題した。習った単語や文字が定着するというのは当たり前のことであり，フォニックス以外の指導で教えていたとしても，発音や意味の理解が身についた可能性もあるため，あえて習っていない単語を出題した。

実践後チャレンジ問題に出題した単語は，①banana②melon③insect ④alligator の 4 つの単語である。①banana（バナナ）と②melon（メロン）は，身近な果物で外来語として親しみがあるが，英語での正確な綴りは知らないので，意味を頼りに発音できない。③insect（インセクト）は，「昆虫」という意味で，あまり馴染みのない単語である。しかし，insect を分解すると「ｉ－ｎ－ｓ－ｅ－ｃ－ｔ」で，10 級から 8 級までのフォニックスのルールを当てはめると，「イ・ン・ス（無声音）・エ・ク（無声音）・トッ（無声音）」となり，続けて読むと「インセクト」と正しく発音ですることができる。また，フォニックス・チャンツ②の中に ink（インク）という単語があり，それを手がかりに読み始めることができる単語である。④alligator（アリゲーター）は，「ワニ」という意味で，「a－ll－i－g－a－t－o－r」に分解され，同じようにフォニックス・ルールを当てはめると，「ア・ル・イ・グ・ア・トッ(無声音)・オ・ウー」となり，続けて読むと「アリガトー」という発音になる。

表 11「読むテスト結果＜実践後チャレンジ問題＞」を見ると，4 問の正答率はそれぞれ，76%，72%，60%，28%であった。その中でも，①banana と②melon は 76%，72%と高い正答率であったが，「バ・ナ・ナ」「メ・ロ・ン」と発音してみて初めて，「バナナ」「メロン」とその意味に気づいた児童が多かった。③insect も 60%の正答率で，半数以上の児童が正確に発音できたことを示している。無答率も 20%で，間違っていても答えようとする姿が見られた。④alligator（アリゲーター）の正答率は，28%と 4 問の中で最も低かった。しかし，無答率は 20%であるように，全く答えられなかった児童は 5 人であり，3. 誤答だが読む努力ありの 52%の児童のほとんどが，「ア・リ・ガ・ト・ー」と発音していた。

【表 11】読むテスト結果＜実践後チャレンジ問題＞

	①banana	②melon	③insect	④alligator
1. 正答	19人	18人	15人	7人
	76%	72%	60%	28%
2. 無回答	4人	3人	5人	5人
	16%	12%	20%	20%
3. 誤答だが読む努力あり	2人	4人	5人	13人
	8%	16%	20%	52%

以上のことから，学習していない新しい単語についても，読むことができることがわかった。

4　考察

前節の結果から，フォニックス実践前と実践後を比較すると，聞く力・読む力とも顕著な伸びが見られることは明白である。正答率の平均をみると，聞く力に関しては，16.5%の伸びがみられ，読む力に関しては、53.6%の伸びがみられるという結果が出ている。ゲーム活動などにおいて，聞き取った単語のカードを選択することができたり，文字を見て発音することができたりする子どもの姿が，検証授業の回を追うごとに増えた。これは，ジョリー・ソングやフォニックス・チャンツを繰り返し行ってきたことにより，文字と音とのルールが自然に身についたことによるものと考えられる。また，身についたルールを活用してゲーム活動を行うことで，さらにルールが定着していったからであるとも考えられる。

最も顕著にフォニックスの効果が表れたのは，前節の(4)で述べた読む力のチャレンジ問題である。授業で扱っていない単語を読むことができる，または読もうとする子どもの姿を多く見取ることができたのは，フォニックスのルールが定着したからと推測できる。特に，④alligatorでは，52%にあたる 13 人の児童のうち，9 人が「ア・リ・ガ・ト・ー」と発音していた。しかし，今回提示した範囲のフォニックス・ルール的には，「アリゲーター」よりも「アリガトー」という発音の方が，よりルールに適応した読み方と言える。つまり，身についたフォニックスのルールを活用できていたと言えるのではないだろうか。

以上のことから，今回の実践において，フォニックス指導が子どもたちの聞く力と読む力の育成につながったと考えられる。

また，子どもたち自身の聞く力や読む力に関する自己評価が高まっている傾向が強い。アンケートの数値からわかるように，どの項目においても，実践前に比べて実践後の方が，肯定的な数値が上がり，否定的な数値が下がっている。このことから，英語の聞く力や読む力が伸びたと実感している児童が増えたことがわかる。また，児童の感想からも，ほとんどの児童がフォニックスを学習したことで，「読めた」「聞き取れた」「意味がわかった」など具体的な効果が分かる。こういったことから，今回のフォニックスの実践では，英語を聞き取る力と文字を読む力といった技能を身につけたこととともに，そのことを子どもたちが実感できたと言える。

さらに，今回の実践を通して，子どもたちの英語活動に対する意欲や関心も高めることができたとも考えられる。これまでの音声中心の授業では，子どもたちは文字と音との関係については学ぶ機会がなかった。しかし，フォニックスのルールを知ることにより，英語のルールや日本語との違いに気づくことができるようになる。また，身につけたフォニックスのルールによって，聞き取った英語からその綴りを推測したり，単語を読むことができたりすることが増え，達成感につながる。さらに，聞く力や読む力など自分の英語力の進歩を実感することで，知的満足感を得ることにつながる。そして，そのことがさらなる英語活動への関心・意欲につながったものと考えられる。英語活動に対する意欲とは，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の素地の一つであるので，フォニックスを実践することで，コミュニケーション能力の素地を養うことにつなげられるのではないかと考えられる。

Ⅵ　研究のまとめ

本研究は，小学校外国語活動において，子どもたちの聞く力と読む力を育てるために，フォニックスを取り入れた指導を実践してきた。実践前・実践後のアンケートやテストの結果を分析・考察することで，フォニックスを取り入れた指導が子どもたちの聞く力と読む力を伸ばすのに有効であるかの検証を行った。その結果，フォニックス指導が，英語を聞いたり読んだりする力を育成することができるという実践の一例を示すことができた。

以下に，本研究で明らかになった成果と残された課題についてまとめる。

１　研究の成果

研究の成果には，以下の３点が挙げられる。

第一に，フォニックス指導によって，不規則といわれる英語の綴りと音の関係にルールを適用させることで，聞くことや読むことをより容易にさせることができることが示唆された。これまでの英語教育では，英単語は一つずつ，その都度発音を暗記していく必要があった。しかし，フォニックスのルールを身につけることで，初めて見る英単語の綴りであっても，その発音を推測できるようになる。また同時に，聞き取った発音から，その綴りを推測できるようになる。今回の検証では，10 級から 8 級のルールを学習しただけであったが，そのような基礎的なルールだけでも，子どもたちはそれを活用して，初めて見た英単語を読むことができていた。そうであるならば，もっと高度なフォニックス・ルールを学習することで，より多くの単語に応用していくことができ，その汎用性は高いと言える。このように，本研究では，フォニックス指導が子どもたちの聞く力と読む力を育成する指導法になりうるという実践の一例を示すことができた。

第二に，フォニックス指導は，高学年の子どもたちの発達段階に適した指導法であることが示唆された。今回の実践においては，アンケートの結果から，実践前に比べて実践後のほうが，子どもたちの英語活動に関する関心・意欲が全体的に高まっている。また，子どもたちの感想からも，英単語を読めるようになったり，聞き取れるようになったりしたことでさらなる意欲につながっていることが伺える。つまり，フォニックス・ルールを身につけていくことで，読む・聞くなどの技能を習得することができるため，達成感を得ることにつながったと考えられる。同時に，フォニックス指導は文字を使った学習であるため，文字を手がかりにした高度な学びができることで，知的満足感にもつながったと考えられる。こういったことから，フォニックス指導は，意欲の低下する高学年の子どもたちにとって，効果的な指導法の一つになりうるという実践例を示すことができた。

第三に，小学校外国語活動におけるフォニックス指導を取り入れた実践プログラムを示すことができた。これまでの小学校外国語活動は，あくまでもコミュニケーション能力の素地づくりと

いうことで，聞く・話す・読む・書くなどの 4 技能については，その習得を目指すまでには至っていなかった。しかし，次の学習指導要領では，3 年生から外国語活動を必修化し，5・6 年生においては教科化するということは，ほぼ確実である。今後，技能の習得も目指した取り組みが必要になる可能性は，非常に大きい。このような流れの中で，小学校外国語活動にフォニックス指導を取り入れるプログラムを実践し，その効果の検証を行ったことは意義があったのではないかと考える。今回検証したのは，Hi friends2 の Lesson5 と 6 の 2 単元の 10 時間分であったが，Hi friends を活用しつつ，フォニックス指導を帯の活動として取り入れていく実践プログラムを考える目安になったと考えられる。

２　研究の課題

研究の課題には，以下の２点が挙げられる。

第一に，中・長期的なスパンでのフォニックス指導の活用について，検討していく必要があることである。成果でも述べたように，今回の検証では，10 級～8 級のみのフォニックス･ルールの導入にとどまった。10 回という限られた時間の中で，また帯の活動という授業実践においては，これが限度であったと思われる。しかし，今後は，より高度なルールも導入していくために，1 年間を見通した取り組み，または 3 年生から 6 年生の 4 年間を見通した取り組みの計画を立てる必要性がある。そうすることで，フォニックス・ルールの更なる定着を図ることができ，聞く力と読む力の育成につながると考えられる。

第二に，小学校外国語活動を評価する際の客観性を高めることである。実践前と実践後に聞くテストと話すテストを行うことで，聞く力と話す力の変容を検証してきた。これまでの先行研究やフォニックスに関する文献などを参考にして，テストを作成したが，小学校外国語活動における標準化されたテストではない。今後，英語の教科化を見据えて，こういった実践検証を行っていく可能性は十分にある。その結果を正確に判断していくためには，標準化されたテストを作成していく必要性があると考えられる。また，今回の研究では，調査対象となる６年生の１クラスにおいて，その効果の検証を図ってきた。今後は，調査対象の規模が拡大することで信頼性を高めていくなど，より客観性の高い検証方法にもとづく研究を進めていくことが望まれる。

今，小学校における外国語教育が大きく変わろうとしている。グローバル化が進められる中，特に英語を話せる日本人の育成が課題に挙げられている。英語を話せる人材育成のためにも小学校のうちから，基礎力を養っていくことは大切であると考えられる。本研究で実証したフォニックス指導が，小学校外国語教育における今後の指導に活用されることを期待したい。

【引用文献】

読売新聞（2013）　2013 年 10 月 23 日号　読売新聞社
文部科学省（2008）　小学校学習指導要領　外国語活動編　東洋館出版社
ベネッセコーポレーション（2006）　第１回小学校英語に関する基本調査（教員調査）報告書
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/pdf/data_07.pdf
文部科学省（2009）　英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2010/12/06/1299796_1.pdf
久埜百合（1996）　英語教育 1996 年 10 月号　大修館書店
アレン玉井光江（2008）　「公立小学校における効果的なリーディング指導について(1)－アルファベット指導－」　千葉大学教育学部研究紀要第５６巻
四日市市小学校外国語活動研究協議会アンケート（2013）
東仁美（2005）　「音声中心のフォニックス指導－公立小学校高学年での文字導入の試み－」p.114　聖学院大学論叢第 18 巻 3 号
松香洋子（1981）　「英語，好きですか」　読売新聞社
野呂忠司（2003）　「小学校の「英語活動」における文字指導の意義と必要性－小学校と中学校における文字指導の連携をめざして－」　愛知教育大学実践総合センター紀要第７号
Laurie Fyke and Kerrie Sinclair(2005)　「Jolly Songs」Jolly Learning Ltd
渋谷玉輝(2011)　「早期英語教育におけるフォニックス導入の可能性」　言語と文明第 9 巻 113-123　麗澤大学　2011 年 3 月 30 日
教育家庭新聞(2013)　2013 年 5 月 6 日号　教育家庭新聞社
Active Phonics(2002)　「Phonics Alphabet Jingle」トラック２　株式会社 mpi

【参考文献】

小山内洸（監修）・斎藤央（著）（1985）　「たのしい英語のフォニックス」三友社出版
影浦攻・町川和子(2008)　「小学校新英語の到達目標と指導のプロセス」明治図書
君塚淳一・西尾直美・田中智子(2010)　「小学校英語における課題を考える－フォニックスの効用と課題(1)－」　茨城大学教育実践研究
田尻悟郎（2006）　「田尻悟郎の楽しいフォニックス」　教育出版
手島良（2004）　「英語の発音ルールブック」　ＮＨＫ出版
手島良（1997）　「スラすら・読み書き・英単語」　ＮＨＫ出版
直山木綿子（2013）　「小学校外国語活動のあり方と“Hi,friends”の活用」　東京書籍
直山木綿子・菅正隆（2009）　「教育技術 MOOK　小学校新学習指導要領の授業　外国語活動実践事例集Ⅰ・Ⅱ」　小学館
松川禮子・大下邦幸（2007）　「小学校英語と中学校英語を結ぶ」　高陵社出版
松香洋子・宮清子（2001）　「Active Phonics」　松香フォニックス研究所　正進社
文部科学省（2012）　Hi,friends　1・2
文部科学省（2012）　Hi,friends　1・2　指導編
湯澤正通・関口道彦・李思嫻（2007）　「日本人幼児における英語の音韻認識」　島大学大学院教育学研究科紀要　　第三部　第 56 号　2007　153-160
Ａ・Ｗ・ハイルマン／松香洋子監訳(1981)　「フォニックス指導の実際」　玉川大学出版部

【資料①】＜アンケート・児童用＞

1．英語の授業は好きですか？
①好き　②どちらかといえば好き　③どちらともいえない　④どちらかといえばきらい　⑤きらい
2．英語の授業に進んで参加していますか？
①はい　②どちらかといえばそう　③どちらともいえない　④どちらかといえばちがう　⑤ちがう
3．英語を聞き取ることができますか？
①はい　②どちらかといえばそう　③どちらともいえない　④どちらかといえばちがう　⑤ちがう
4．　英語の単語をみて読むことができますか？
①はい　②どちらかといえばそう　③どちらともいえない　④どちらかといえばちがう　⑤ちがう
5．英語の単語をみて意味がわかりますか？
①はい　②どちらかといえばそう　③どちらともいえない　④どちらかといえばちがう　⑤ちがう
6．英語が使えるようになりたいですか？
①はい　②どちらかといえばそう　③どちらともいえない　④どちらかといえばちがう　⑤ちがう
7．英語の授業で楽しいと思うことは何ですか？　　＊いくつ選んでもよいです。
①英語の歌を歌うこと　②英語のゲームをすること ③英語で友達と会話すること　④外国のことについて学ぶこと ⑤日本語と英語のちがいを知ること　⑥英語の文字や単語を読むこと ⑦英語の文字や単語を書くこと　⑧みんなの前で英語でスピーチすること
8．＜実践前＞これからの英語でどんなことがしてみたいですか？ ＜実践後＞フォニックスを学習して，どんな力がついたと思いますか？

【資料②】聞くテスト（一斉）

Class_____ No._____

♪English Time♪

NAME

1．聞こえたアルファベットを１つ選んで，○でかこみましょう。

①	b	e	g	a	d
②	k	m	u	j	n
③	r	w	o	q	l
④	f	p	z	t	s
⑤	y	h	c	x	i

2．聞こえた単語を1つ選んで，　○でかこみましょう。

①	egg	pig	ink	ant
②	bear	hand	lion	nest
③	rabit	girl	yard	fish
④	cat	cut	cap	cup
⑤	map	mop	mug	man

【資料③】聞くテスト（個別）

聞こえたアルファベットや単語を１つ選ぶ。

①	p	b
②	t	d
③	k	g
④	f	v
⑤	l	r

①	sun	dog	jam	key
②	witch	question	monkey	zebra
③	bag	big	pig	bed
④	pot	dot	pop	top
⑤	fax	box	tax	fox

【資料④】読むテスト（個別）

アルファベットや単語を１つずつ発音する。

①	a
②	e
③	w
④	p
⑤	h

①	apple
②	socks
③	ten
④	doctor
⑤	octopus

【資料⑤】実践後チャレンジ問題

単語を１つずつ発音する。

①banana	②melon	③insect	④alligator

【資料⑥】ジョリー・ソング

Ｓの歌・・・草むらにヘビがいるという話で，「Ｓ」の発音がヘビの鳴き声になっている。アクションは「Ｓの文字を指でなぞる」だったが，「体全体を使ってＳの形を作る」にアレンジした。

Ａの歌・・・アリが腕に上ってくるという話で，「Ａ」の発音がアリに気づいて驚いた子どもの声になっている。アクションは，腕に上ってきたアリを振り払う動作をした。

Ｔの歌・・・テニスの試合で，ボールを目で追って頭が自然に左右に振れるという話。テニスのラリーでボールが左右に飛ぶのを目で追うアクションをつけた。

Ｉの歌・・・ネズミがインクをこぼしてインクに浸ってしまうという話。アクションは両手を顔の前で動かしてネズミのヒゲを表した。

Ｐの歌・・・誕生日に大きなピンクの豚の形をしたケーキのろうそくを吹き消すという話。「Ｐ」の発音をしながら，ろうそくを吹き消す動作を行った。

Ｎの歌・・・空に飛行機が飛んでいるという話。「Ｎ」の発音が飛行機のエンジン音になっている。アクションは，両手を広げて飛行機が飛んでいる真似をした。

Ｃ/Ｋの歌・・・1 番はカスタネットを叩く話で、アクションは両手を上げてカスタネットを叩いている動作を行った。２番は凧が空を舞うという話で，１番と同じアクションだったが，話に合っていないので凧揚げの時に糸を引っ張る動作に変えた。ＣとＫは文字は違うが同じ発音であることがこの歌でよくわかった。

Ｅの歌・・・卵を割ってフライパンで調理するという話。アクションは，卵を「コン・コン・パカッ」のリズムで割る動作をした。

Ｈの歌・・・子どもが野原をスキップしているという話。アクションは，口に手を当てて息を吐く動作だったが，座ったまま腕をふってスキップする動作に変えた。

Ｒの歌・・・仔犬がボロ布を噛んで戯れているという話で，「Ｒ」の発音が犬の唸り声になっている。アクションは，犬がくわえたボロ布を振り回す真似をした。

Ｍの歌・・・母親と父親がお腹の空いた子どもたちのためたくさん料理を作るという話で，「Ｍ」の発音が美味しい物を食べた時に出す声になっている。アクションは，満腹になってお腹をさする動作をした。

Ｄの歌・・・ドラムを叩くという話で，「Ｄ」の発音がドラムを叩く音になっている。アクションは，左右の手を上下に動かしてドラムを叩く動作をした。

Ｇの歌・・・雨水が排水溝をどくどくと音を立てて流れるという話。アクションは，手で渦を作って水が排水溝に吸い込まれていく様子を表した。

Ｏの歌・・・夜になって部屋の明かりをつけて，寝る時に消すという話。人差し指を動かしてスイッチを操作する動作をした。

Ｕの歌・・・雨が降ってきたので傘をさすという話。「Ａ」と同じ曲を使っているので，「Ａ」と「Ｕ」の発音の違いについて知ることができた。アクションは，傘を広げる動作をした。

【資料⑦】フォニックス・ルール

	文字	発音の仕方	練習単語			
第1時	A,a	口を横に開いて，あごを下げながら「ア」と言う	ant	bat	tap	alligator
	B,b	Pと同じようにして，「ブッ」と声に出す	bag	bus	bed	banana
	C,c	Kと同じ音。口の奥で，「ククク」と笑う感じで　＜無声音＞	cat	cap	cup	car
	D,d	Tと同じようにして，「ドッ」と声に出す	doctor	door	desk	deer
	E,e	日本語の「エ」より少し口を横に開いて「エ」と言う	ten	bed	pet	left
	F,f	上の歯でかるく下の唇をかんで「フッ」と出す　＜無声音＞	fan	fat	film	frog
	G,g	Kと同じようにして，「グググ」と笑う感じ	girl	gate	guitar	grass
	H,h	なるべくのどの奥の方から「ハッ」と言う　＜無声音＞	hand	horse	ham	hen
	I,i	Eの音を出す口の形で「い」と短くあいまいに言う	pin	milk	big	insect
第2時	J,j	軽く「ジュ」と言う	jam	jeans	jug	jar
	K,k	口の奥で，「ククク」と笑うような感じで　＜無声音＞	key	skip	skin	ketchup
	L,l	舌の先を歯の裏側につけて，短く「ル」と言う	leg	log	lips	bell
	M,m	口を閉じ，鼻に息を通しながら，「ムー」と言う	map	mop	man	drum
	N,n	口を閉じないで，下に先を歯茎にふれて，「ヌ」と言う	nut	net	nap	number
	O,o	口をたてに大きく開けて，息を口の奥に通すようにして「ア」と言う	pot	hot	dot	office
	P,p	口をかたく閉じてから，声に出さずに「プッ」と出す　＜無声音＞	pen	pet	piano	stop
	Q,q	Kと同じ音。口の奥で，「ククク」と笑う感じで　＜無声音＞	question	quick	request	rainbow
	R,r	Wを言うように口をすぼめながら，舌の先を丸めて上にはつけずに，「ル」と言う	ring	run	red	rat
第3時	S,s	歯と歯をかるく合わせ，舌をどこにもつけないで「ス」と言う　＜無声音＞	socks	six	sit	sad
	T,t	舌の先を上の歯茎につけて，声に出さずに「トッ」と出す　＜無声音＞	top	table	tin	television
	U,u	驚く時に出す，短い，「アッ」の音	bug	bud	tub	umpire
	V,v	Fと同じ口の形で「ヴ」と音を出す	vest	van	vase	VIP
	W,w	口をすぼめて，一気に元に戻すつもりで「ウ」と言う　＜無声音＞	wink	well	wig	window
	X,x	KとSを合わせた音で，「クス」と言う　＜無声音＞	box	sax	fax	text
	Y,y	何か嫌なことがあったつもりで「イヤ！」と強く言う	yes	yum!	yen	yellow
	Z,z	Sと同じようにして，「ズ」と言う	zoo	zip	zero	zipper

【資料⑧】フォニックス・チャンツ①

English Time

Phonics Alphabet

A says "a, a" apple.

文字の名前　文字の音　キーワード

このように、AからZまでリズムに乗りながら覚えていきましょう！

a A	b B	c C	d D	e E	f F
apple	bear	cow	dog	egg	fish
g G	h H	i I	j J	k K	l L
goat	hat	ink	jet	king	lion
m M	n N	o O	p P	q Q	r R
monkey	nest	octopus	pig	queen	rabit
s S	t T	u U	v V	w W	x X
sun	tiger	umbrella	violin	witch	fox
y Y	z Z				
yard	zebra				

Name

【資料⑨】フォニックス・チャンツ②

【資料⑩】ゲームルール一覧

ゲーム名　＜形式＞	ゲームの内容・ルール
キーワードゲーム ＜全体・ペア・グループ＞	・読み上げられた単語をリピートしていき，キーワードの時だけリピートの代わりに手をたたく。 ・手をたたく以外に，足ぶみをする，手を頭の上におくなどの動作に変更していくことも可能。 ・全体だけでなく，ペアやグループ等で，キーワードの時だけ消しゴムを取り合うなどの活動に変更することも可能。
ミッシングゲーム ＜全体・グループ＞	・黒板にアルファベットや単語のカードを貼って，全員が目を閉じている間に１枚抜き取り，”What’s missing?”のかけ声で目を開けて，どのカードが無くなったか答える。 ・黒板に貼る枚数や，抜き取るカードの枚数を増減させることで，難易度を変える。 ・全体で行うだけでなく，列やグループごとに行うことも可能。
チェーンゲーム ＜全体・グループ＞	・グループで列になり，アルファベットを１文字ずつ伝言していく。 ・列の最後の子が，黒板に貼られているカードの中から伝言された文字や単語を選ぶ。
カルタ取り＜グループ＞ 【参考資料⑪⑫】のカードを使用	・読み上げられたアルファベットや単語のカードを取る。 ・絵カードのみ，文字カードのみ，両方のカードなど，使用するカードを変えることで難易度や変化をつける。
神経衰弱＜グループ＞ 【参考資料⑪⑫】のカードを使用	・トランプの神経衰弱のルールと同じように，文字（英単語カード）と絵（意味）カードがそろったら，カードをもらう。 ・カードをめくる時に発音するなど，ルールを追加することも可能。
ペアさがし＜グループ＞ 【参考資料⑪⑫】のカードを使用	・トランプのジジ抜きのルールと同じように，文字（英単語カード）と絵（意味）カードがそろったら，カードを捨てる。 ・カードを捨てる時に発音するなど，ルールを追加することも可能。
どれどれタッチゲーム ＜全体・ペア・グループ＞	・黒板にアルファベットのカードを貼って，読み上げられた文字を取る。 ・グループやペアでの活動に変更することも可能。
アルファベットバスケット＜全体＞	・各自にアルファベットカードを持たせて，フルーツバスケットのルールの要領で行う。
文字探し	・タイマーなどを表示して，全て探すまでにかかった時間を計るなどの工夫も可能。

【資料⑪】ゲーム用カード①

【資料⑫】ゲーム用カード②

ant	bag	cat	doctor	ten	fan
girl	hand	pin	jam	key	legs
map	nut	pot	pen	question	ring
socks	top	bug	vest	wink	box
yes	zoo				

【資料⑬】文字探しゲーム①

【資料⑭】文字探しゲーム②

【資料⑮】文字探しゲーム③

文字さがしゲーム③

name:

★次の文字を探して、
丸で囲みましょう！
＜タテ･ヨコ･ナナメ＞

①dog
②king
③pig
④sun
⑤umbrella
⑥witch
⑦fox
⑧yard

d	z	y	u	m	b	r	e	l	l	a
e	o	b	q	x	y	g	f	c	e	r
z	l	g	x	d	t	p	l	g	b	h
n	k	a	r	e	t	n	z	l	r	m
l	p	w	b	f	q	j	r	x	a	w
y	u	l	g	t	o	m	w	s	p	k
a	l	t	a	b	l	x	l	u	k	l
r	f	c	x	p	h	j	m	n	o	n
d	n	h	e	t	u	y	c	r	z	g

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究
～フォニックスを活用した実践を通して～

研究対象　小学校６年生
研究領域　小学校外国語活動

〔研究協力員〕　四日市市立三重西小学校　教　　諭　原　由香里
〔執　筆　者〕　四日市市教育委員会教育支援課　研　修　員　吉川　記代
〔指導・助言〕　国立教育政策研究所　総括研究官　松尾　知明

研究調査報告　第３９２集

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究
～フォニックスを活用した実践を通して～

発　行　　平成２６年３月２０日
発行所　　四日市市教育委員会教育支援課
四日市市諏訪町２番２号
電話（059）354-8283
FAX　（059）359-0280